彦根市埋蔵文化財調査報告　第14集

南川瀬遺跡・鍬取遺跡・上沢尻遺跡
発掘調査報告書

――団体営ほ場整備事業に伴なう――

昭和62年3月

彦根市教育委員会

序

本報告書は、団体営ほ場整備事業に伴ない、昭和60・61年度に実施しました、上沢尻遺跡等の発掘調査の報告であります。近代化の波は農業にもおよんで久しいものがありますが、本市においてもほ場整備事業が進みつつあります。この時期をのがさず、埋蔵文化財の調査を進めて行く必要があります。この事は、あまり知られていなかった地域の歴史を明らかにする可能性を広げて行く事につながるとともに、必要な事でもあるでしょう。今後、あらゆる機会に調査を進めていきたいと考えます。また、これ等の資料をどの様に活用して行くのかは、私達に課せられた問題でもあります。結論は早急には出せませんが、明日の彦根を作るための貴重な資料となる事は言うまでもありません。

文末になりましたが、本調査に御理解、御協力いただきました地元の方々をはじめ関係諸機関の方々に対して厚く御礼を申しあげます。また、本書が歴史研究・豊かな地域形成の一助になれば幸いです。

昭和62年3月

彦根市教育委員会
教育長　河　原　保　男

例　　言

1. 本書は、昭和60・61年度に実施した補助事業市内遺跡群発掘調査事業の報告書である。
2. 市内遺跡群として、昭和60年度には上沢尻遺跡、昭和61年度には鍬取遺跡・南川瀬南遺跡の発掘調査を実施した。
3. 各遺跡は、上沢尻遺跡が彦根市宇尾町字上沢尻、鍬取遺跡が彦根市賀田山町字鍬取、南川瀬南遺跡が彦根市川瀬馬場町他に所在している。
4. 調査は、社会教育課技師本田修平が担当し、現地における作図等は主に調査協力員円城伸彦・沢田具高・植野克志（いずれも岐阜経済大学ＯＢ）がおこなった。この他、調査には多くの方々の御協力を得た。記して感謝したい。
5. 本書の執筆・編集は本田修平がおこなった。
6. 出土遺物等の資料は本市教育委員会が保管している。

目　　次

上沢尻遺跡 …… 3

南川瀬南遺跡 …… 6

鍬 取 遺 跡 …… 12

出土遺物観察表 …… 13

図　版

図版１～18 …… 25

写真図版１～14 …… 43

上　沢　尻　遺　跡

1. 位置と環境

上沢尻遺跡は、滋賀県彦根市宇尾町小字上沢尻付近に所在する。この地は犬上川の中流域の南岸に位置し、地理的には犬上川の形成した沖積地の微高地に立地していると考えられる。犬上川は、北に向って張り出して来た鈴鹿山地の北端である霊仙山系の南側から流れ出し、多賀町域に広い扇状地を形成しながら、彦根市域の中央部を貫流し広い沖積地を作りながら琵琶湖へと注ぐ。犬上川は、「彦根市史」に記述があるように中流部の集落がきれいにデルタ状に並び、旧デルタが地図上で明確に推定でき、広い流域を持っていた事が知られる。この事から、古代における犬上川は周辺に広い低湿地を作りながら網状に流れていたと思われる。

この犬上川流域は、彦根市内においても早くから開けていた地域の１つであり、現在では対岸になるが福満遺跡では縄文時代後期・晩期の遺物をはじめ弥生時代後期以降各時期の遺物および古墳時代後期以降の住居跡等を確認しており、縄文時代後晩期における低湿地遺跡の１つの存在様式を示しているものと考えられる。この水系における弥生時代の前中期の遺跡はまだ不明であるが、弥生時代後期には掘南遺跡で３基の方形周溝基を確認している。調査区域が限られていたためこの他の遺構は不明であるがこの付近に集落跡が存在する事は確実であると考えられる。古墳時代前期の遺物を出土した遺跡は、竹ケ鼻廃寺・福満遺跡等をあげる事ができる。竹ケ鼻廃寺は、奈良時代前期の寺院跡と考えられるが、それに先行して古墳時代前期から集落が形成されていた事が調査で確認している。古墳時代後期の遺跡としては、横地遺跡・葛籠北遺跡で後期群集墳を確認している。その大半は地山まで削平された周溝だけが残っている状態であったが、葛籠北遺跡の１号墳は木棺直葬墳であった事を確認しており、平野部における群集墳の１つのありかたを示していると考えられる。この様な平地における後期群集墳は、今後その出土例が増加するものと考えられる。この時代の住居跡は、福満遺跡・横地遺跡等で隅丸方形プランの竪穴住居跡であるが、堀南遺跡では東側に作り付けのかまどが検出されており、彦根市内においては初めての出土例である。奈良時代には前記した竹ケ鼻廃寺の他に高宮廃寺が知られているが、その詳細については不明である。この時代の集落跡は、掘立柱建物跡を中心として確認されており、葛籠北遺跡等で検出している。竹ケ鼻廃寺の調査では、寺院跡自体の遺構は確認できなかったが、寺院周辺に所在した集落の遺構を確認しており、古墳時代前期から奈良時代にかけての集落が営まれており、寺院が造

営された事を考えあわせれば、この水系における中心的集落の１つであった事が考えられる。

以上の様に、犬上川水系における彦根市域の歴史的環境は、確実に縄文時代後期まで遡る事が可能であり、古代におけるこの地域の微地形を復元する事ができれば、その歴史がより一層明確になるものと思う。

2. 調査に至る経過と調査方法

今回の発掘調査は、団体営ほ場整備事業の工事に先だち、事前調査として実施したものである。当該地は、北流して来た犬上川が竹ケ鼻・宇尾町の集落が所在する微高地に阻まれ迂回した南側で、犬上川旧河川の分流の痕跡と思われる小水路の間に位置する水田地帯である。

河瀬土地改良区は、ここを昭和60年度の事業として８haのほ場整備を計画して当教育委員会に遺跡の有無の確認があった。当教育委員会では、現地の確認調査を実施し、小字上沢尻を中心とする須恵器等遺物の散布地である事を確認した。この結果から、今回のほ場整備地域内には上沢尻遺跡の所在が明らかになったため、河瀬土地改良区と事前調査が必要であるということで協議に入った。工事予定は昭和60年度の冬期施工と言う事であり、秋の収穫直後から調査を実施することにした。

遺跡の確認調査では、遺物の散布状況は把握できるが、遺跡の範囲は不明であるため、工事で遺跡の削平が確実に予想される幹線排水路予定地で重機による試掘調査を先ず行ない遺跡の範囲を明確にすることを第１の目的とし、包含層・遺構等が確認できた場合は、その性格を把握するため、トレンチを拡張して調査を実施することとして計画した。

現地における発掘調査は、昭和60年10月中旬から試掘調査を実施し、第１号排水路での包含層等を確認したため、引き続きトレンチの拡張を行ない遺跡の精査を実施した。遺跡は、沖積地の微高地上に立地しており、一部トレンチ壁面の崩壊等もあったが、昭和60年11月30日に終了し、その後資料整理等を行ない、昭和61年３月31日を持って全事業を終了した。

3. 調査の結果

試掘調査は、排水路予定地に現状の田一枚おきに試掘トレンチを設定する事から始めた。結果的に記せば、北側の２号支線排水路では６ケ所の試掘トレンチを設定したが、一部流れ込みによると見られる須恵器片等の遺物の出土を見たが、遺構は確認できなかった。また、１号支線排水路では、５ケ所の試掘トレンチを設定し、１～４トレンチで

包含層・遺構等を確認したため、トレンチを拡張して１本のトレンチになった。以下このトレンチについて記したい。

＝１トレンチ＝

基本土層は、表土が水田耕作土、第２層は黄褐色粘質土層（床土）、第３褐茶灰色粘質土層、第４層灰色粘土層であり、この第４層が遺構面になる。

遺構は、トレンチ東端南側で遺構面の灰色粘土層が皿状に落ち込み植物遺体の混った黒褐色粘質土層が入るトレンチを傾めに走る落ち込みが確認できた。この落ち込みを掘り込んだところ、古墳時代後期から奈良時代までの遺物を包含しており、土質や出土遺物の状態から低湿地に留り込んだ２次的な包含層である事が考えられる。調査地点は犬上川南岸の堤防より約10ｍほどの地点であり、沼状に広がる低湿地がこの時代に沖積作用により埋立された結果の落ち込みであろう。また、この落ち込みを切り込んだ径１ｍほどの円形のピットが検出され、ここからは漆器の椀が出土しており、中世以降には沖積作用が終了していたものと思われる。

遺構面では、耕作地の関係で溝状の遺構がトレンチ中央部までで４本検出できた。３本はトレンチに直交するもので、１本トレンチとほぼ並行するものであった。このうち、ＳＤ－２からは土師器の甑・甕２個体が出土した。また、溝を掘り込んだ下からは若干のピットが検出できたが、建物跡とは考えられない。トレンチ中央部では巾70cm深さ１ｍほどのしっかりした溝が検出できた。この溝内には古墳時代後期から奈良時代にかけての遺物が入っており、断面で確認した結果２回の補修が認められた。

以上、今回の調査では、犬上川南岸に位置する関係から、微高地と低湿地の接点に調査地点があたったと考えられる。

4. ま と め

今回の調査では、犬上川中流域の古墳時代後期以降の１つの遺跡の立地パターンが確認できたと考える。以下に調査結果を箇条書きにしてまとめとしたい。

1）今回の調査地点は、低湿地と微高地の接点に位置しており、この低湿地は古墳時代後期には沖積作用が進み、遅くとも中世には沖積作用が終っていたと考えられる。

2）今回の調査で検出できた溝等の遺構は、古墳時代後期以降のものであり、残存状態の良いものがかなりあり、遠くからの流入とは考えられない事から、調査地点の北側に微高地が広がり、ここの遺跡が存在する事が予想できる。

3）１トレンチ中央部で検出できた溝は、２回にわたる作り替えが確認できた。

以上、今回の調査は、遺跡の周辺部にあたった可能性が強く、今後周辺の調査が進めば、古墳時代後期以降の遺跡が明らかになってくると考えられる。

南 川 瀬 南 遺 跡

1. 位置と環境

南川瀬南遺跡は、彦根市川瀬馬場町他に位置しており、国道８号線と旧中山道の間に広がる水田地帯である。この地域は、鈴鹿山系の北端に位置する霊仙山系から流れ出す犬上川の扇状地の扇端部にあたる。旧中山道は、彦根市内においては宇曽川・犬上川・芹川等の扇状地扇端部を縫うように通り抜け、甲良町四十九院から葛籠町に至る旧中山道は松並木を残し、集落の家並とともに落ち着いた景観を残している。この古代からの交通の要所は現代まで続いており、前記した国道８号線と並行して国鉄新幹線も通っている。

以上のように、この地域は交通から見ても古くから人々の足跡が残されている事が当然予想されるとともに、遺跡においても種々な様相が見られる地域である。この地域は、水系で言えば犬上川南岸にあたり、旧郡名は犬上郡である事から、古事記・日本書紀に登場する豪族「犬上県主」・「犬上君」等の氏族との関連が古くから言われている。つまり、犬上君の本貫地がこの犬上郡であり、推古朝に遣唐使として遣わされた犬上御田鍬はこの地の古代豪族であったことが言われる。しかし、この事を証することはまだまだ資料不足であり、今後この地域の調査を進める上での一つの課題であると考える。

犬上川流域における遺跡の調査は、まだまだ進んでいないが、昨年発掘調査を実施した葛籠北遺跡の様に考古学的に注目される地域である。地域を犬上川南岸に限るなら、本遺跡の北側約３kmの横地遺跡では、弥生時代後期以降の遺物が出土しており、遺構は古墳時代後期の小円墳（地山まで削平を受けており、主体部は不明）・土壙・住居跡等が確認されている。弥生時代後期の遺構としては、この横地遺跡と並んで所在する堀南遺跡では、弥生時代後期と考えられる方形周溝墓３基と古墳時代後期の造り付けかまどのついた竪穴住居跡等を検出した。古墳時代後期においては犬上川の沖積作用がかなり進んでいたと考えられ、宇尾町地先の上沢尻遺跡では低湿地と微高地の接点を調査しており、溝等から古墳時代後期以降の遺物が出土している。また、国道８号線と旧中山道間に広がる葛籠北遺跡では、木棺直葬の主体部を持つ古墳時代後期の小円墳８基・土壙墓６基の他、奈良時代と考えられる掘立柱建物跡14棟を検出している。奈良時代の遺跡として甲良町で調査された長畑遺跡は、本遺跡の南約２kmの所であり整然と配置された掘立柱建物跡群・井戸等が検出されて、建物配置から有力氏族の居宅跡か地方官衙の可能性が言われている。

この様に、この地域では古墳時代後期以降の遺跡が比較的多く調査されており、土地開発が進んだ事がうかがえる。弥生時代後期では限られた地域（非常に安定した微高地と考える）が先ず開発されたと考えられ、古墳時代後期になると犬上川の沖積作用が進みある程度の沖積地が形成された様に見える。

以上は、この地域の限られた調査に基づくラフスケッチであり、今後の調査の進展で違った視点が浮び上って来ると考えられるが、平地における後期群集墳の形成は、この地における地域的な集団の成長を予想させるものであろう。

2. 調査に至る経過と調査方法

河瀬土地改良区は、かねてよりこの地域の土地改良総合整備事業を計画していた。この計画は全域で58haにおよぶものであり、大正時代から戦前にかけて実施された耕地整理につぎ、現代における土地改良としては２度目のものである。この計画がまとまった段階で河瀬土地改良区により彦根市教育委員会教育長あて、昭和61年６月５日付け河土改第49号で埋蔵文化財確認調査依頼が提出された。彦根市教育委員会では、該当地域で南川瀬南遺跡・葛籠南遺跡・法師南遺跡の３遺跡が所在している事を確認していたため、昭和61年７月５日付けで予定どおり工事を実施する場合は事前の調査が必要である旨回答した。以降、彦根市教育委員会と河瀬土地改良区は協議に入ったわけであるが、ほ場整備の工事予定は昭和62年度冬であり、それまでに該当地域の発掘調査を実施することとした。ただし、ほ場整備対象面積は58haと広く、その年度では調査をしきれないため、一部昭和61年度に調査を実施することとした。この地域が、旧中山道より北側の南川瀬南遺跡にあたっていると考えられた。

この協議結果に基づき、昭和61年11月６日付け河土改第137号で埋蔵文化財発掘届および埋蔵文化財発掘調査依頼の提出が河瀬土地改良区よりあった。彦根市教育委員会では、昭和61年11月14日付けで発掘届を進達するとともに同日付け彦教委社第1054号で埋蔵文化財発掘調査通知を文化庁長官あてで提出した。

ほ場整備工事の計画では、田面の強い切り盛りはなく、遺跡が削平を受ける可能性が強い所は排水路予定地であるので、先ずこの排水路予定地に試掘トレンチを設定し、遺跡の範囲を確認する事を主目的とした。この結果遺跡が確認できた場合は、排水路予定地に沿ってトレンチを拡張して可能な限り遺跡の性格を把握することとした。しかし、調査地は昭和62年にもう１回耕作する予定であるため、なるべく水路・畦畔を切らずにトレンチを設定することで調査の計画をした。

現地の調査は、昭和62年１月13日から実施し、その後埋め込しや調査資料の整理等

を行ない、同年3月31日を持って全ての事業を完了した。

3. 調査の結果

南川瀬南遺跡は、以前の分布調査の段階では、旧中山道から広がり近江鉄道彦根営業所等が所在する舌状の微高地に位置するものと考えていた。この地域では耕作土面で須恵器等の遺物の散布が見られ、葛籠北遺跡発掘調査報告書（1985年　彦根市教育委員会発行）では散布地として上げられた地域でさった。

試掘トレンチは、先ず遺跡の所在が最も強く予想されたこの地域の排水路予定地から設定した。この排水路は、今回の予定地では上から下まで等高線と直交する様に設定されているものである。結果から記せば、この地域での基本土層は、マクロ的に見れば旧氾濫原であった事が考えられる。試掘トレンチは、この地域で計7ケ所設定し、一部の第2・3層で若干の須恵器等遺物の出土を見たのであるが、遺物の量が少なく、またこの地域の土層の状態から見て流れ込みによるものと考えられた。また、葛籠町の下手西側にあたる排水路予定地では、基本的な土層は前述の地域とあまり変化はなく、地表下60cmで黄褐色礫混り土層になり、遺物の出土も確認できなかった。この地域も基本的には氾濫原であった事がうかがえる。

今回の調査で包含層・遺構等遺跡である事が確認できた範囲は、国道8号線に沿って木材市場等が所在している地域の南側でほ場整備予定地の北側を画する排水路予定地であった。この地域は、試掘調査の段階で遺物の包含層を確認したため、試掘調査終了直後から田ごとにトレンチを拡張して1～5トレンチとした。地形は、この地域の南側の田が一段下がり、このトレンチを設定した田が舌状の微高地を成している。以下、これ等のトレンチの詳細を記したい。

＝ 1トレンチ ＝

このトレンチは、排水路北端に位置するもので、4.5m × 9.5mの大きさで設定した。土層は、耕作土20cm・床土20cm・第3層茶褐色粘質土・第4層茶褐色砂礫土層になる。第2層の床土の面で旧田面の畦畔が確認できたが、この畦畔東側で留り込んだ茶褐色粘質土層で土師器の長甕片が出土した。このため、西側畦までトレンチを拡張したが、この層で見えた砂礫の留った溝状のものは下の第4層が部分的に顔を出したものである事が掘り込みを実施して確認できた。また、トレンチ北端でピット状の落ち込みが3ケ所検出したが遺構になるかどうかは不明である。この地点も基本的には沖積地であり、出土した遺物は流れ込んだものと考えられる。

＝ 3トレンチ ＝

2トレンチで遺構が確認できたため、葛籠町から国道8号線に抜ける農道の東側に設定したものである。土層は基本的には2トレンチと同様であったが、トレンチ西側2/3の地山は褐茶色砂層になり、遺構は確認できなかった。このトレンチを設定した田も過去に激しい沖積作用を受けていた事が考えられる。

＝ 4トレンチ ＝

3トレンチと農道をはさんだ反対側に設定したもので、この田から東側に向って田面は一段低いものである。土層は、第2層の床土までは同一であったが、第3層は褐灰色粘質土層に東側が半円形によごれた灰黄色粘質土層が入っており、湿地が埋った状態と考えられた。この層を約1m掘り下げたが、近世陶磁器を含む包含層である事が確認できた。出土遺物は、その大半が須恵器片であり、奈良時代以降のものであった。この事からトレンチ東側の一段低い田は、遅くても奈良時代には低湿地化しており、近世までこの状態であった事が考えられる。

＝ 5トレンチ ＝

4トレンチの西側の一段高い田に設定したもので、4トレンチで留地状の低湿地を確認したため、この周辺に遺構が存在する可能性が考えられたからである。調査結果を記せば床土面で旧田面を確認したにとどまった。また、遺物等の出土もなかった。

＝ 2トレンチ ＝

今回の発掘調査で唯一確実な遺構が確認できたトレンチで、試掘調査時に暗茶褐色粘質土の包含層が検出できたため、田の巾ぎりぎりまで拡張した。トレンチは4.5m×4.2mを計った。遺構は、地表下約50cmの黄灰色粘質土層で検出したのであるが、後にトレンチ断面で確認したところ床土下の第3層から遺構は切り込んであり、10cmほど遺構面を削り込んでいた事がわかった。以下、各遺構について記したい。

＝ SH－1 ＝

2トレンチ西端で検出した竪穴式住居跡で、トレンチ端にかかっているためその規模は不明である。また、この住居跡に切られた形でSK－1が確認できたため、この部分だけトレンチを畦近くまで拡張した。竪穴式住居跡は、検出した部分で方形をなしており、埋土からは長甕片等が小破片ではあるが出土している。この他、住居跡に付随するような周構ピット等は検出できなかった。主軸は、N－18°－Wである。

＝ SH－2 ＝

SH－1の東側約1.5mの所で検出した竪穴式住居跡で、この周辺は地山が全体によごれており非常に遺構の検出が困難な所であった。住居跡の規模は、1辺2.1mの方形

のプランを成し、深さはほぼ10cmと保存状態は非常に悪かった。埋土内には若干の須恵器片等が包含されており、これを掘り込んだ床面で住居跡内の柱と考えられるピットが３ケ所検出できた。主軸は、Ｎ－35°－Ｅであった。この住居跡は１辺が２ｍ強と小さく、竪穴式住居跡とするには小々問題があるかも知れないが、ここでは一応住居跡としておきたい。

＝ＳＨ－３＝

ＳＨ－１とほぼ主軸を同じにする方形プランの住居跡で、ＳＨ－１とは約5.5ｍ東側に位置している。深さは10cm弱と残存状態は悪かったが、住居跡内の柱と考えられるピットが２ケ所確認できた。埋土内からの遺物の出土は須恵器等の小破片が極小量であり、その時代を明確に示す様な遺物はなかった。住居跡の規模は１辺４ｍの小規模なもので、主軸はＮ－30°－Ｅである。

＝ＳＨ－４＝

この住居跡は、試掘調査の段階では包含層と思われたもので、トレンチを拡張した結果、竪穴住居跡である事が確認できたものである。住居跡の切り込み面は、断面で確認したところ、床土下の第３層から切り込んでいた事がわかった。住居跡内の掘り込みは、中央に畦を残して床面の検出をしたが、東側壁面コーナー付近に扁平な人頭大の河原石を10個ほど集積した所があった。この河原石の基底部は黄灰色粘土の中に据えてあり、一部は動いた形跡が見られたが、石を敷いた集石遺構に須恵器坏身が乗っている状態で出土した。この集石が据えられた粘土面は、住居跡中央部に向かって馬の背状に叩き締まっており、中央部より西側では部分的に残る状態になる。以上の様な遺構の状態を考えれば、この粘土が床と考える事が可能ならばこの床に据えられた石組は階段状のものと考える事も可能であろう。この他の住居跡の壁面と並行してピットが２ケ所検出しており、石組と考え合わせれば入り口のピットと考える事も可能であろう。しかし、このピットは、東側のピット群と同時期として建物跡と考える事もでき、今回の限られた調査では確定できなかった。今後、この様な資料が報告されるのを待ちたい。

＝ＳＨ－５＝

ＳＨ－４に切られ、ＳＨ－４より１まわり大きな住居跡で、ＳＨ－６に切られている事を確認したもので、１辺７ｍ強を計った。埋土内には、極少量の小破片しか遺物はなく、その時代を示す様なものは出土していない。主軸はＮ－20°－Ｗであった。

＝ＳＨ－６＝

前述した様にＳＨ－５を切った形の不整形な落ち込みで、一部に焼土が見られたため一応住居跡として精査した。埋土よりの遺物は、ＳＨ－５同様非常に少なく、時代を示

すものは出土しなかった。

＝ＳＫ－１＝

ＳＨ－１の床面まで掘り込んだ時点で確認できた土壙で、黒茶色粘質土が入った１ｍ強の楕円形をなし、埋土内には弥生時代中期の土器片が入っていた。この他の地点ではこの時期の土器の出土はなかった。

＝ピット群＝

今回の調査では、多数のピット群が確認でき、その並びに一定の方向性がうかがえ掘立柱建物跡と考えられる地点が数ケ所ある。しかし、限られた調査範囲の中では明確に建物跡を明らかにするまでには至らなかった。

＝ＳＨ－４下層＝

ＳＨ－４の畦より西側の床面検出時に、住居跡内埋土と極めて良く似た土層があり、床面の検出ができなかった。畦の断面で確認したところ、張床と考えられる粘土層が非常に薄いものであったため、結果的に言えば掘り過ぎたものであるが、この下層にも土器片等が入っており、包含層である事が確認できた。この包含層と住居跡の関係を確認するため、トレンチに直交する様に畦に並行した断ち割りを入れ、また、遺構が少ない東側壁面にも断ち割りを入れ、この包含層の範囲を確認した。

住居跡ＳＨ－４と包含層の関係は、ＳＨ－４が包含層の上面を切り込んだ状態で床面粘土質が確認できた。また、ＳＨ－４西側を掘り込んだ時点での出土遺物に須恵器等住居跡と同時代と考えられる遺物が混っていた事から、住居跡を掘り込んだ時点で遺物が混入したものと考えられる。

包含層はほぼ60cmの厚さがあり、住居跡直下が出土遺物は多く、下に行ほど少なくなった。この事から考えれば、地山と考えていた遺構面の黄灰色粘質土層は沖積作用の結果形成された沖積層であると思われる。

断ち割りの可能な所は限られており、下層の十分な範囲を確認する事はできなかったが、今後この付近で縄文時代晩期の遺構を確認できる可能性が極めて大きい。ほ場整備に伴なう排水路予定地と言う極めて限られた発掘調査ではあったが、今後この地域の歴史を考える上で非常に貴重な資料となると考えられる。

鍬　取　遺　跡

・鍬取遺跡の試掘調査について

本遺跡は、彦根市賀田山町地先の宇曽川北岸の宇曽川が山崎山・荒神山に行く手を阻まれ流れを北方に向けた彎曲部にあたる。この宇曽川と並行する様に須越川が流れており、これを宇曽川分流の残存と考えれば、この地域がかなり強い低湿地であった事が考えられる。

調査は、彦根市南部土地改良区の亀山西部地区ほ場整備事業に先だち実施したものである。この土地改良事業は、昭和60年度から実施されているもので、計画段階で埋蔵文化財確認調査依頼の提出が昭和59年11月にあり、この事点で須恵器等の遺物が散布している事を確認して、予定どおり工事を実施する場合は事前調査が必要である旨回答した。

改良区との協議の結果、昭和61年度工事施工区域が遺物の散布地にあたっているため、施工前に調査を実施することとした。また、調査は、削平が予想される排水跡予定地を中心として、先ず重機で試掘調査を実施し、包含層・遺構等遺跡の範囲が確認できた場合は、試掘トレンチを拡張して遺跡の性格を把握することとして計画した。

現地における試掘調査は、昭和61年7月21・22日の両日にわたり実施したが、現地は強い低湿地および氾濫原の様相を示し、包含層・遺構等は認められなかった。このため、調査は試掘調査にとどめ、その後トレンチ設定図・土層の柱状図等実測作業を進めた。しかし、用水路からの水がトレンチ設定区域にあふれ、トレンチが水没する等悪条件がかさなり、作業は困難を極めた。このため、排水作業が流入水においつかなかった幾つかのトレンチは、土層の柱状図が作製できなかった。

以上、鍬取遺跡の発掘調査について記して来たが、今回の調査結果から考えれば、確認調査の時点で耕作土面で採取された須恵器片は、流れ込みによるものと考えて良いと思われる。調査地域に近接して流れる宇曽川・須越川は、現在でこそ河道が安定しているが、以前はかなり激しい氾濫をくり返していた事が考えられ、この付近で遺跡を求めるとすれば、安定した微高地である事が必須条件である。今後、より精密な確認調査が必要であると思われる。

上沢尻出土遺物観察表

番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
1	土師器 高坏脚部		○ 柱状部は胴張りにしたもので、脚部は「ラッパ」状に開く。	○ 外面は粗いハケ調整。 ○ 内面柱状部はヘラ状のものでおさえて成形しており、脚部はナデ調整。	胎土：良好 色調：淡赤褐色 焼成：硬	SX－02
2	土師器 高坏脚部		○ 柱状部は内彎ぎみに作られ、脚部は「ラッパ」状に開く。	○ 柱状部内面はヘラ状のものでおさえて成形している。 ○ 外面はハケ調整と思われるが、器表剥脱のため不明。	胎土：良好 色調：赤褐色 焼成：軟	〃
3	土師器 甕	口径 15.9	○ しまった頸部より口縁は外反ぎみに開き、端部を丸くおさめる。	○ 口縁部は内外面ともに器表剥脱のため不明であるが、ハケ調整か。 ○ 体部内面は横方向のヘラ切りと思われる。	胎土：2㎜以上の砂粒を極少量含む 色調：灰褐色 焼成：やや軟	〃
4	土師器 長甕		○ 底部は平底にちかい丸底で、体部は内彎しながら立ち上がる。	○ 内外面粗いハケ調整。	胎土：良好 色調：黄灰色 焼成：やや硬	SD－02
5	土師器 甕	口径 12.8 器高 17.6	○ 底部は不整形の平底で体部は「U」字形をなし、口頸部は外反して開き、端部を丸くおさめる。 ○ 頸部に波線を入れる。	○ 口縁部は内外面ともにハケ調整の後、横ナデ調整。 ○ 体部外面は上部ハケ調整で、それより下は指ナデ調整。 ○ 体部内面はハケ調整。 ○ 底部内面は不調整で、外面はヘラナデ調整。	胎土：1㎜前後の砂粒を若干含む 色調：白黄色 焼成：硬	〃
6	土師器 皿	口径 19.6	○ 体部は外反して開き、端部を弱く上方に引き出し、内面に波線状の凹みが	○ 内外面横ナデ調整。 ○ 暗文は細いヘラ状の工具によると思	胎土：精良 色調：赤褐色	SX－02

番号	種類・器形	法　量	形　　態	調　　整	胎土・色調・焼成	備　考
			入る。 ○　たて方向の細い暗文が入る。	われる。	焼成：硬	
7	土師器 皿	口径 15.1 器高 3.2	○　不調整な平底から体部は内彎して開き、口縁部内面に凹線をいれ、端部を丸くおさめる。 ○　内面底部から体部下半に細い直線と、らせん形のヘラによる暗文を入れる。	○　体部上半内外面は横ナデ調整。 ○　底部外面はナデか。	胎土：精良 色調：赤褐色 焼成：硬	SD－07
8	土師器 皿	口径 12.6 器高 2.9	○　やや凹みぎみの平底から体部は内彎して開き、口縁部に強いナデを入れて外反させ、端部内面に凹線を入れ、端部を丸くおさめる。 ○　内面に斜傾して暗文を入れ、内外面丹塗りである。	○　口縁部内外面は横ナデ調整。 ○　内面は細いヘラ磨き。 ○　外部底部は指おさえで成形後、粗いヘラ磨き。	胎土：精良 色調：明赤褐色 焼成：硬	SX－02
9	土師器 皿	口径 9.4 器高 1.8	○　不調整な平底より体部は内彎して立ち上がり、端部を丸くおさめる。	○　外面上半部と内面は横ナデ調整。 ○　底部外面は指頭痕を残して不調整。	胎土：精良 色調：淡赤褐色 焼成：軟	SX－01
10	土師器 土錘	全長 3.4	○　両端をしぼって中央部が胴張りにした形である。 ○　螺旋状の波線が入る。	○　心棒に粘土を巻いて作っていると思われる。	胎土：精良 色調：赤褐色 焼成：軟	〃
11	土師器 土錘	全長 3.7	○　両端をややしぼり、中央部が若干胴張りした形である。	〃	胎土：精良 色調：赤褐色 焼成：軟	SX－02
12	土師器 甑	口径 24.6 器高 32.4	○　体部は砲弾型に作り、底部端を面取りして１枚の粘土板をわたす。口縁端部も面取りしている。 ○　把手をほぼ体部中央に張り付ける。	○　口縁部から体部上半は横ナデ調整。 ○　体部内外面はハケ調整。 ○　把手は張り付けで指頭で成形。	胎土：精良 色調：淡灰黄色 焼成：硬	SD－02

番号	種類・器形	法　量	形　　態	調　　整	胎土・色調・焼成	備　考
13	須恵器 高坏蓋	口径 12.4 器高 5.2	○　受け部は内傾し端部を丸くおさめる。 ○　天井部は「ドーム」状に作り、リング状のつまみを張り付けている。	○　体部は内外面ともにロクロナデ調整であり、天井部外面はヘラ削りの後、ロクロナデ調整。 ○　つまみは張り付け。	胎土：精良 色調：青灰色 焼成：硬	SX－02
14	須恵器 坏　蓋	口径 15.2	○　受け部は面取りがなされ体部との接点に凹線が入り、天井部は「ドーム」状に作られている。 ○　天井部内面に凹線が入る。	○　内面および体部外面がロクロナデ調整。 ○　天井部外面はヘラ削り。	胎土：精良 色調：黒灰色 焼成：硬	〃
15	須恵器 坏　蓋	口径 19.0	○　体部は扁平な「ドーム」状をなし、端部内面を引き出し、受け部を作り端部を丸くおさめる。	○　内面はロクロナデ調整。 ○　外面はヘラ削りの後横ナデ調整。	胎土：良好 色調：灰色 焼成：硬	SD－07
16	須恵器 坏　蓋	口径 16.3	○　天井部は「ドーム」状をなし、断面三角形の掛け部を作る。	○　内面および外面下半分はロクロナデ調整。 ○　外面天井部はヘラ削りの後横ナデ調整。	胎土：良好 色調：淡灰色 焼成：硬	〃
17	須恵器 坏　蓋	口径 16.1 器高 3.6	○　受け部は断面三角形に作られ、浅い「ドーム」状の天井部に宝珠つまみを張り付ける。 ○　全体にゆがんでいる。	○　体部は内外面ともにロクロナデ調整。 ○　宝珠つまみは張り付け。	胎土：精良 色調：白灰色 焼成：硬	SX－02
18	須恵器 坏　蓋		○　扁平な天井部に小さく厚みのある宝珠つまみがつく。	○　外面はヘラ削りの後横ナデ調整。 ○　内面は横ナデ調整。つまみは張り付け。	胎土：2㎜前後の砂粒が極少量含む。 色調：淡灰色 焼成：硬	SD－07
19	須恵器 坏蓋つまみ		○扁平な宝珠つまみである。	○　内外面横ナデ調整。 ○　つまみは張り付け。	胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：硬	〃

番号	種類・器形	法　量	形　　態	調　　整	胎土・色調・焼成	備　考
20	須恵器 坏蓋つまみ		○　扁平な宝珠つまみである。	○　内外面横ナデ調整。 ○　つまみは張り付け。	胎土：精良 色調：淡青灰色 焼成：硬	SX－02
21	須恵器 坏　身	口径　6.8 器高　3.2	○　不整形な平底から体部は外傾して開き、端部を丸くおさめる。	○　器表剥脱のため不明。	胎上：精良 色調：灰色 焼成：軟	〃
22	須恵器 坏　身	口径 12.6	○　体部は外反ぎみに開き端部を丸くおさめる。 ○　底部は平底である。 ○　坏蓋の可能性がある。	○　体部は内外面ともにロクロナデ調整。 ○　低部外面はヘラ切りの後ナデ調整。	胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：硬	〃
23	須恵器 坏　身	口径 12.1 器高　3.55	○　不整形な平底から体部は外傾して開き、端部を丸くおさめる、	○　体部は内外面ともにロクロナデ調整。 ○　底部外面はヘラ切りの後ナデ調整。	胎土：精良 色調：淡青灰色 焼成：硬	SD－07
24	須恵器 坏　身	口径 11.4 器高　3.1	〃	○　体部は内外面ともにロクロナデ調整。 ○　底部外面はヘラ切りの後ナデ調整。	胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：硬	SX－02
25	須恵器 坏　身	口径 11.5	○　ヘラ切りによる粘土が残る平底の底部より体部は傾斜して開き、端部を丸くおさめる。	○　体部内外面および底部内面はロクロナデ調整。 ○　底部外面はヘラ切りの後ナデ調整。	胎土：精良 色調：白灰色 焼成：硬	SD－07
26	須恵器 坏　身	口径 14.4	○　代部は傾斜して開き、端部を丸くおさめる。 ○　底部は平底である。	○　体部は内外面ともにロクロナデ調整。 ○　底部外面はヘラ切りの後ナデ調整。	胎土：2㎜以下の砂粒を極少量含む。 色調：淡青灰色 焼成：硬	SX－02
27	須恵器	口径 15.0	○　体部は外傾して開き、端部を丸くお	○　体部は内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：2㎜以下	〃

番号	種類・器形	法　量	形　　態	調　　整	胎土・色調・焼成	備　考
	坏　身		さめる。 ○　高台の付く器形と考えられる。	○　体部は内外面ともにロクロナデ調整。	の砂粒を極少量含む 色調：淡灰黄色 焼成：硬	
28	須恵器 坏　身	口径 15.1 器高 4.2 高台径 10.1	○　高台は内傾ぎみにしっかりふんばっており、体部は外彎しながら開き、端部を丸くおさめる。 ○　坏底部は凹み、高台の底と同一の高さである。	○　体部は内外面ともにロクロナデ調整。 ○　坏底部はヘラ切り。 ○　高台は張り付け。	胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：硬	SX－02
29	須恵器 坏　身	口径 18.7 器高 3.8 高台径 13.5	○　高台はふんばりぎみにやや内傾して作られ、体部は外反して開き、端部を丸くおさめる。 ○　底部はやや厚く作られる。	○　体部は内外面ともにロクロナデ調整。 ○　坏底部はヘラ切り後、ナデ調整。 ○　高台は張り付け。	胎土：精良 色調：淡青灰色 焼成：硬	〃
30	須恵器 坏　身	高台径 10.4	○　高台は断面台形をなしふんばった形で、体部は斜傾して開く。	○　体部内外面はロクロナデ調整。 ○　高台は張り付けで横ナデ調整で、底部外面も横ナデ調整。	胎土：精良 色調：青灰色 焼成：硬	SD－07
31	須恵器 坏　身	高台径 10.5	○　高台は断面台形をなし、体部はやや内彎ぎみに立ち上がる。	○　体部内外面はロクロナデ調整。 ○　高台は張り付けで横ナデ調整で、底部外面はヘラ切後横ナデ調整。	胎土：2㎜以下の砂粒を若干含む 色調：濃灰色 焼成：硬	〃
32	須恵器 坏　身	高台径 9.1	○　ややふんばった断面四角の高台より体部は内彎して立ち上がる。	○　体部内外面はロクロナデ調整。 ○　高台は張り付け。 ○　底部はヘラ切りで不調整。	胎土：良好 色調：青灰色 焼成：硬	〃
33	須恵器 坏　身	高台径 10.8	○　高台は断面四角形でややふんばり、体部に至る。	○　体部内外面はロクロナデ調整。 ○　高台は張り付けで横ナデ調整。	〃	〃

番号	種類・器形	法　量	形　　態	調　　整	胎土・色調・焼成	備　考
				○　底部はヘラ切りで不調整。		
34	須恵器 坏　身	高台径 8.4	○　高台は断面台形をなし、ふんばった形で体部に至る。 ○　全体に胎土は厚手である。	○　体部内外面はロクロナデ調整。 ○　高台は張り付けで横ナデ調整。 ○　底部外面は中心部ヘラ切りで、高台付近はヘラ切りの後、横ナデ調整。	胎土：精良 色調：灰色 焼成：硬	SX－02
35	須恵器 坏　身	高台径 10.9	○　高台は断面台形でつよくふんばり、体部に至る。	○　体部内外面はロクロナデ調整。 ○　高台は張り付けで横ナデ調整。 ○　底部外面はヘラ切りで不調整。	胎土：2㎜以下の砂粒を若干含む 色調：濃灰色 焼成：硬	〃
36	山茶椀 椀	高台径 8.1	○　断面四辺形の高台から体部は斜傾して開く。	○　体部内外面はロクロナデ調整。 ○　高台は張り付けでナデ調整。 ○　底部外面は糸切り。	胎土：精良 色調：淡灰白色 焼成：硬	〃
37	須恵器 甕	口径 39.7	○　口縁部は強く外反して開き、端部を上面に弱く折り返し、端部を断面三角形に作る。 ○　外面に4本の櫛状工による波状文と凹線を入れる。	○　内外面はロクロナデ調整。	胎土：良好 色調：淡黒灰色 焼成：硬	〃
38	須恵器 甕	口径 22.7	○　あまり張らない肩部より頸部はややしまり、口縁部は外反して開き、端部を内面にやや引き出し、端部を面取りしておさめる。	○　頸部、口縁部内外面ともにロクロナデ調整。 ○　外面頸部下は櫛状の工具でハキ目を入れる。 ○　体部は外面並行、内面青海波文のタタキ痕を残す。	胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：軟	〃
39	須恵器 長頸壷	口径 12.0	○　よくしまった頸部より口縁部はゆるく外彎して開き、端部を丸くおさめる。	○　内外面はロクロナデ調整。 ○　頸部は体部に張り付けてある。	胎土：精良 色調：青灰色 焼成：硬	SD－01

番号	種類・器形	法　量	形　　態	調　　整	胎土・色調・焼成	備　考
40	須恵器 短頸壷	口径　9.8	○　しまった頸部より直線的に立ち上がり、端部を丸くおさめる。	○　内外面はロクロナデ調整。	胎土：1㎜前後の砂粒を含む 色調：白灰色 焼成：硬	SX－02
41	須恵器 鉢	口径 14.8	○　体部は内彎して立ち上がり、端部内面を弱く肥厚させ端部を面取りする。 ○　体部外面中位部に一条の波線を入れる。	〃	胎土：精良 色調：灰色 焼成：硬	〃

南川瀬南出土遺物観察表

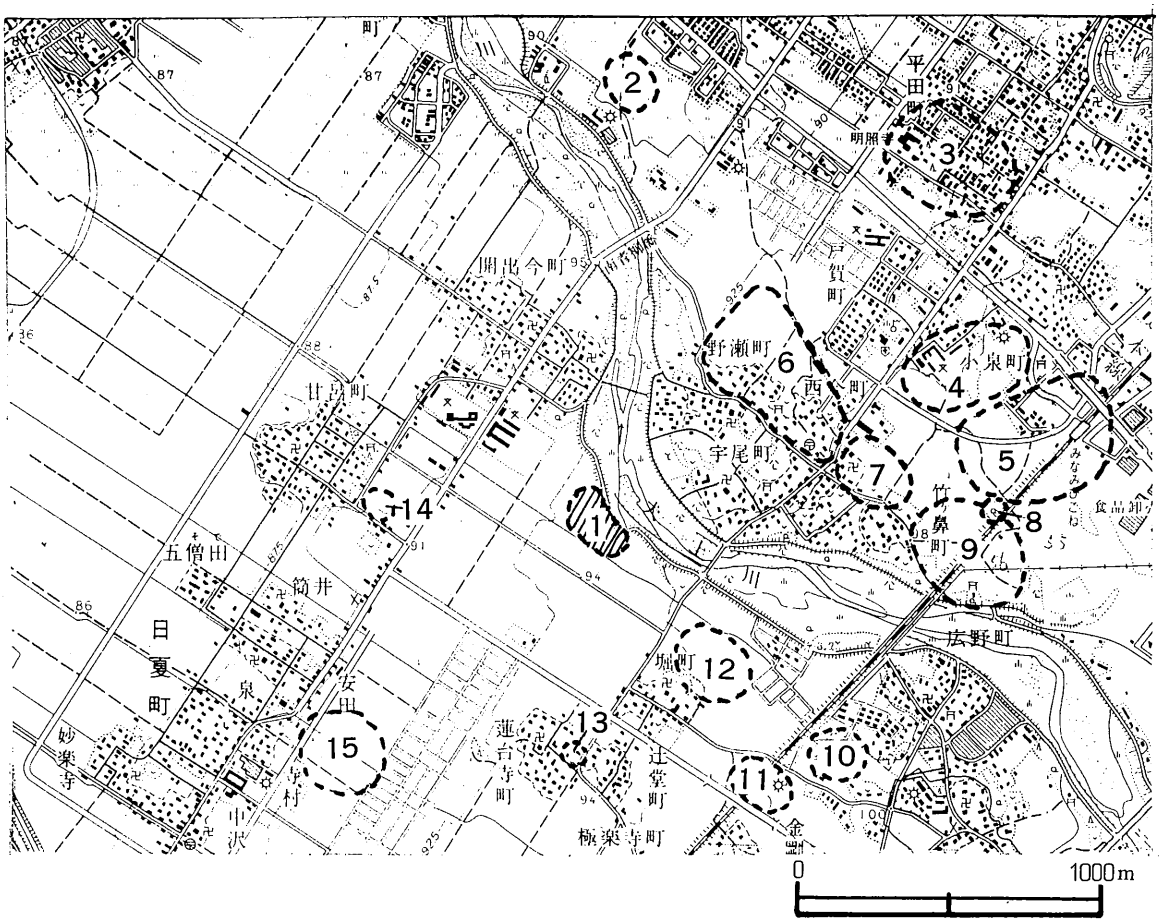
番号	種類・器形	法量	形態	調整	胎土・色調・焼成	備考
42	須恵器		○ 横瓶の破片と考えられ、体部は外面櫛状工具によるカキ目を入れる。	○ 体部外面は並行線のタタキ痕を残して、その後カキ目調整で、内面は青海波文のタタキ痕を残し、その後横ナデ調整。	胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：やや硬	SH－4 埋土
43	灰釉 長頸壷	高台径 10.2	○ 強くふんばった断面台形の高台から体部は内彎ぎみに立ち上がる。	○ 体部外面ヘラ削りの後、ナデ調整で内面ロクロナデ調整。 ○ 高台は張り付けで、横ナデ調整。	胎土：精良 色調：釉・淡灰黄色 焼成：硬	〃
44	須恵器 鉢	底部径 10.6	○ 平底の底部より体部は内彎ぎみに開く。	○ 体部ロクロナデ調整。 ○ 底部不調整。	胎土：良好 色調：青灰色 焼成：硬	〃
45	須恵器 鉢	底部径 14.5	○ 不整形な平底の底部より体部は厚手に作られ、大きく外傾して開く。	○ 内外面横ナデ調整。 ○ 底部不調整。	胎土：精良 色調：白灰色 焼成：やや硬	〃
46	須恵器 平瓶	図上復元	○ 頸部を中心とする破片を図上復元した。 ○ 体部上部と頸部に凹線を入れる。	○ 体部はロクロナデ調整。 ○ 頸部ナデ調整。	胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：硬	〃
47	須恵器 不明		○ 平瓶の破片がと思われ、シャープな作りで平面はほぼ平らに作られている。 ○ 弱い凹線が平面に２本、傾面に１本入っている。	○ 外面はヘラ削りの後、横ナデ調整。 ○ 内面は横ナデ調整。	胎土：精良 色調： 外面…黒灰色 内面…青灰色	〃
48	須恵器 坏蓋	口径 13.6	○ 掛け部は断面三角に作り、扁平な天井部に至る。	○ 内外面ロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：硬	〃

番号	種類・器形	法　量	形　　態	調　　整	胎土・色調・焼成	備　考
49	須恵器 坏　蓋	口径 14.0	○　掛け部は断面三角に作り、扁平な天井部に至る。	○　内外面ロクロナデ調整。	胎土：精良 色調：淡青灰色 焼成：硬	SH－4 埋土
50	須恵器 坏　蓋	口径 14.6	○　端部を肥厚させ掛け部を作り、天井部は扁平なドーム形を成している。	〃	胎土：精良 色調：白灰色 焼成：硬	SH－4
51	須恵器 坏　身	口径 11.6 器高 3.55	○　平底から後部は外反ぎみに開き、端部を丸くおさめる。	○　体部内外面はロクロナデ調整。 ○　底部はヘラ切りの後ナデ調整。	胎土：精良 色調：乳白灰色 焼成：軟	〃
52	須恵器 坏　身		○　不整形な平底から体部は内彎して立ち上がる。	〃	胎土：精良 色調：淡青灰色 焼成：硬	SH－4 下層
53	須恵器 坏　身		○　不調整な平底の底部より体部は外傾して開く。	○　体部内外面はロクロナデ調整。 ○　底部ヘラ切り不調整。	胎土：精良 色調：青灰色 焼成：硬	4－T
54	須恵器 坏　身		○　不整形な平底より代部は内彎ぎみに立ち上がる。	○　体部内外面はロクロナデ調整。 ○　底部はヘラ切り後ナデ調整。	胎土：精良 色調：淡灰色 焼成：硬	SK－2
55	須恵器 坏　身	高台径 9.9	○　高台は薄くふんばった断面台形をなす。	○　体部内外面はロクロナデ調整。 ○　高台は張り付けで、底部はヘラ切りの後ナデ調整。	胎土：精良 色調：淡青灰色 焼成：硬	2－T 第3層
56	須恵器 坏　身	高台径 8.6	○　小さな断面四角の高台から体部は内彎して立ち上がる。	○　体部内外面はロクロナデ調整。 ○　高台は張り付け。 ○　底部はヘラ切り後ナデ調整。	胎土：精良 色調：白灰色 焼成：軟	SH－4 埋土

番号	種類・器形	法　量	形　　態	調　　整	胎土・色調・焼成	備　考
57	須恵器 鉢	口径 19.6	○　体部は内彎ぎみに開き、口縁部を弱く折り返し内傾させ、端部をややつまみ出し、断面三角の口縁を作る。	○　内外面ともにロクロナデ調整。	胎土：精良 色調： 外面…黒灰色 内面…乳白色 焼成：やや硬	SH－4 埋土
58	土師器 長　甕	口径 16.9	○　張らない肩部から口縁部は「く」の字状に開き、端部を面取りする。 ○　頸部外面に波線上の線が入る。	○　器表剥脱のため不明。	胎土：精良 色調：乳白灰色 焼成：軟	SH－4
59	土師器 長　甕	口径 19.6	○　体部は肩の張らない砲弾型をなし、あまりしまらない頸部から口縁部は内彎して立ち上がり端部を面取りする。	○　頸部から口縁部は内外面ともにハケ調整後横ナデ調整。 ○　体部は内外面ともにハケ調整。	胎土：精良 色調：淡黄褐色 焼成：やや軟	〃
60	弥　生 甕	口径 17.8	○　口縁部は外反して開き、端部を弱く折り返し、「受け口」状を程する。	○　器表剥脱のため調整法不明。	胎土：良好 色調：暗赤褐色 焼成：軟	SK－1
61	弥　生 甕	口径 12.2	○　頸部はあまりしまらず、口縁部は外傾して開き、折り返して端部を上方に伸し端部を面取りする。 ○　口縁部と頸部下肩部上面に弱い凹線を入れ、その下に破片ではヘラによる波状文が入る。	○　外面は粗いハケによる調整。 ○　内面口縁部横ナデ、その下から頸部は粗いハケによる調整。 ○　体部内面は横ナデ調整と思われる。	胎土：1㎜以下の金雲母等を含む 色調：黄灰色 焼成：軟	〃
62	弥　生 甕底部	底部径 5.1	○　平底から体部は外彎ぎみに開く。	○　外面は粗いハケによる調整。 ○　内面は横ナデ調整と思われる。	胎土：1㎜以下の金雲母等を含む 色調：褐灰色 焼成：やや軟	SK－1 32と同一個体
63	弥　生	口径 26.4	○　口縁部は外反ぎみに開き、端部を若	○　内面はハケ調整後横ナデ調整。	胎土：良好	SK－1

番号	種類・器形	法　量	形　　態	調　　整	胎土・色調・焼成	備　考
	甕		干肥厚ぎみに作り、端面に刻みを入れる。	○　外面は横ナデ調整。	色調：褐黄色 焼成：やや軟	
64	縄　文 深　鉢		○　口縁が強く内傾して２段の凸帯を持つ器形と考えられる。 ○　刻みは「楕円」形のものである。	○　器表剥脱のため調整法不明。	胎土：3㎜前後の砂粒を含む 色調：暗赤褐色 焼成：軟	SH－4 断割り 下層
65	縄　文 深　鉢		○　口縁部は外反して開き、外面下に断面三角形の刻みのない凸帯を作る。	○　外面粗いハケ状の工具による器面調整。 ○　内面調整法不明。	胎土：2㎜前後の砂粒を若干含む。 色調：茶灰色 焼成：軟	断割り 下層
66	縄　文 深　鉢		○　口縁部は外反して開き端部外面を肥厚させて台形の口縁部を作り、その下に刻みのない台形の凸帯を作る。	○　内外面とも調整法不明。	胎土：良好 色調：乳灰黄色 焼成：やや軟	SH－4 埋土
67	縄　文 深　鉢		○　口縁部外面に断面三角形の凸帯をつけ楕円形の刻みを入れる。	○　外面ナデ調整と思われ、内面は不明。	胎土：良好 色調：赤褐色 焼成：軟	断割り 下層
68	縄　文 深　鉢		○　口縁部は外反して開き、口縁部下外面に断面三角形の楕円形の刻みを入れた凸帯を作る。	○　内外面とも調整不明。	胎土：2㎜前後の砂粒を若干含む 色調：明赤褐色 焼成：軟	SH－4 下層
69	縄　文 深　鉢		○　口縁部は外傾して開き、外面下に断面三角形の凸帯を作る。	〃	胎土：2㎜前後の黒雲母等砂粒を含む 色調：淡赤褐色 焼成：やや軟	SH－4 埋土

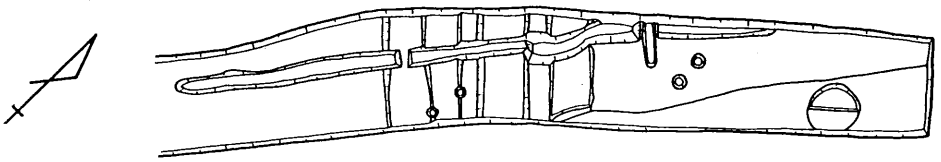
番号	種類・器形	法　量	形　　態	調　　整	胎土・色調・焼成	備　考
70	縄　文 深　鉢		○　口縁は内傾して立ち上がり、口縁部外面下に断面三角形で小さな楕円形の刻みを持つ凸帯を作る。	○　内外面とも調整法不明。	胎土：良好 色調：淡黄褐色 焼成：軟	SH－4 下層
71	縄　文 深　鉢		○　口縁部は内傾して立ち上がり、外面下に断面台形で「D」字状の刻みを持つ凸帯を作る。	〃	胎土：良好 色調：淡褐灰色 焼成：やや軟	SH－4 埋土
72	縄　文 深　鉢		○　2段の凸帯の下のもので断面四角形でヘラ状のもので「D」字状の刻みを持つ凸帯を作る。	○　外面凸帯付近はナデ調整で、それより下はヘラ状の工具によるナデ調整。 ○　内面は調整法不明。	胎土：良好 色調：淡黄灰色 焼成：やや硬	SH－4 下層
73	縄　文 深　鉢		○　口縁部の破片と考えられ、口縁外面とすぐ下に断面三角形の凸帯を作る。	○　調整法不明。	胎土：3㎜前後の砂粒を若干含む 色調：黄白色 焼成：軟	SH－4 埋土
74	縄　文 深鉢底部	底部径 5.9	○　不整形な平底の底部より体部は外傾して開く。	○　器表剥脱のため不明。	胎土：2㎜前後の砂粒を含む 色調：茶褐色 焼成：軟	2－T
75	縄　文 深鉢底部	底部径 8.6	○　厚い平底の底部より体部は外傾して開く。	〃	胎土：2㎜前後の砂粒を含む 色調：淡黄灰色 焼成：軟	断割り－2 下層
76	石　鏃		○　有茎石鏃。 ○　基部を損失。	○　石材はサヌカイト。		2－T下層
77	石　鏃		○　無茎石鏃、二等辺三角形をなす。	○　石材は不明。		2－T下層



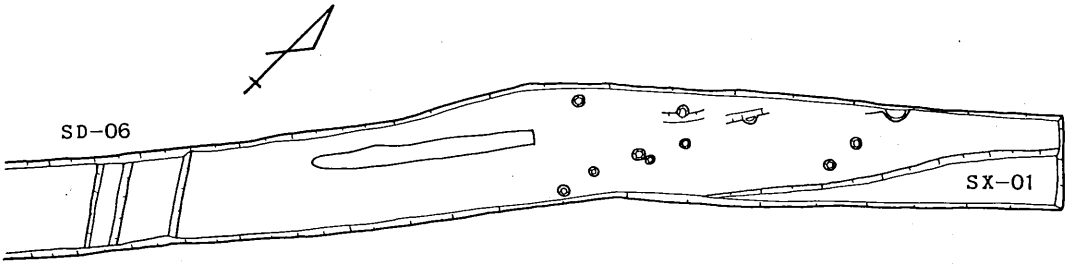
図版－1　上沢尻遺跡調査地点と周辺の遺跡

1	上沢尻遺跡（今回調査地）	9	竹ケ鼻廃寺
2	中久保遺跡	10	横地遺跡
3	木戸口遺跡	11	石原遺跡
4	福満遺跡	12	門田遺跡
5	品井戸遺跡	13	蓮台寺遺跡
6	須川遺跡	14	甘呂遺跡
7	西今遺跡	15	寺村遺跡
8	椿塚遺跡		

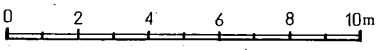
図版－２　上沢尻遺跡トレンチ配位図

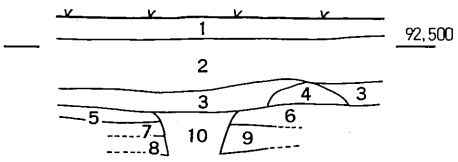


第１遺構面

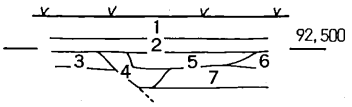


第２遺構面

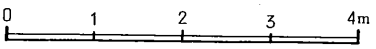




SD−06　断面図



トレンチ北壁断面図



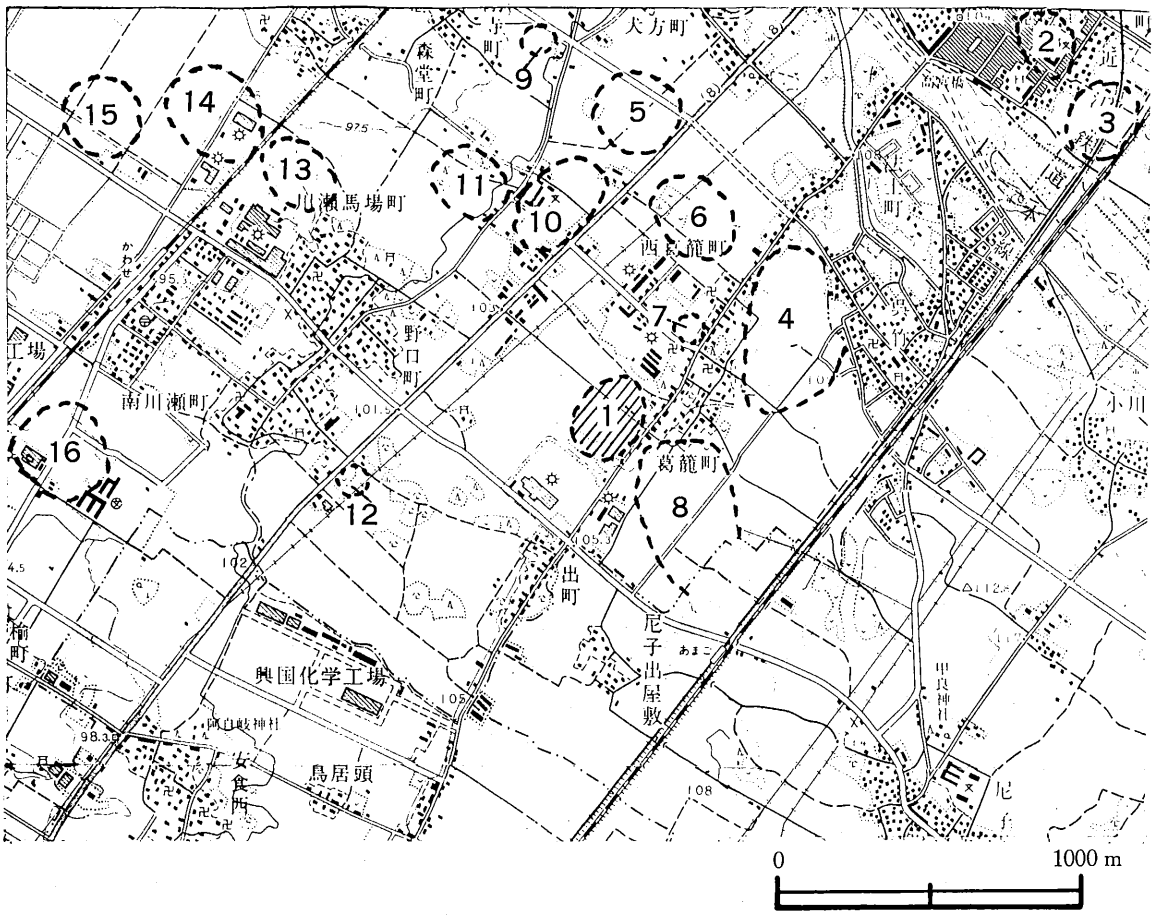
SD−06　断面図土色表

1　耕　土
2　明褐灰色粘質土層
3　灰褐色粘質土（小レキ混）
4　茶褐色砂質土層
5　暗灰色粘質土（小レキ混）
6　暗灰色砂質土層
7　灰黄色砂質土層
8　灰黄色粘質土層
9　暗灰色砂質土層
10　淡灰色粘質土層

北側断面図土色表

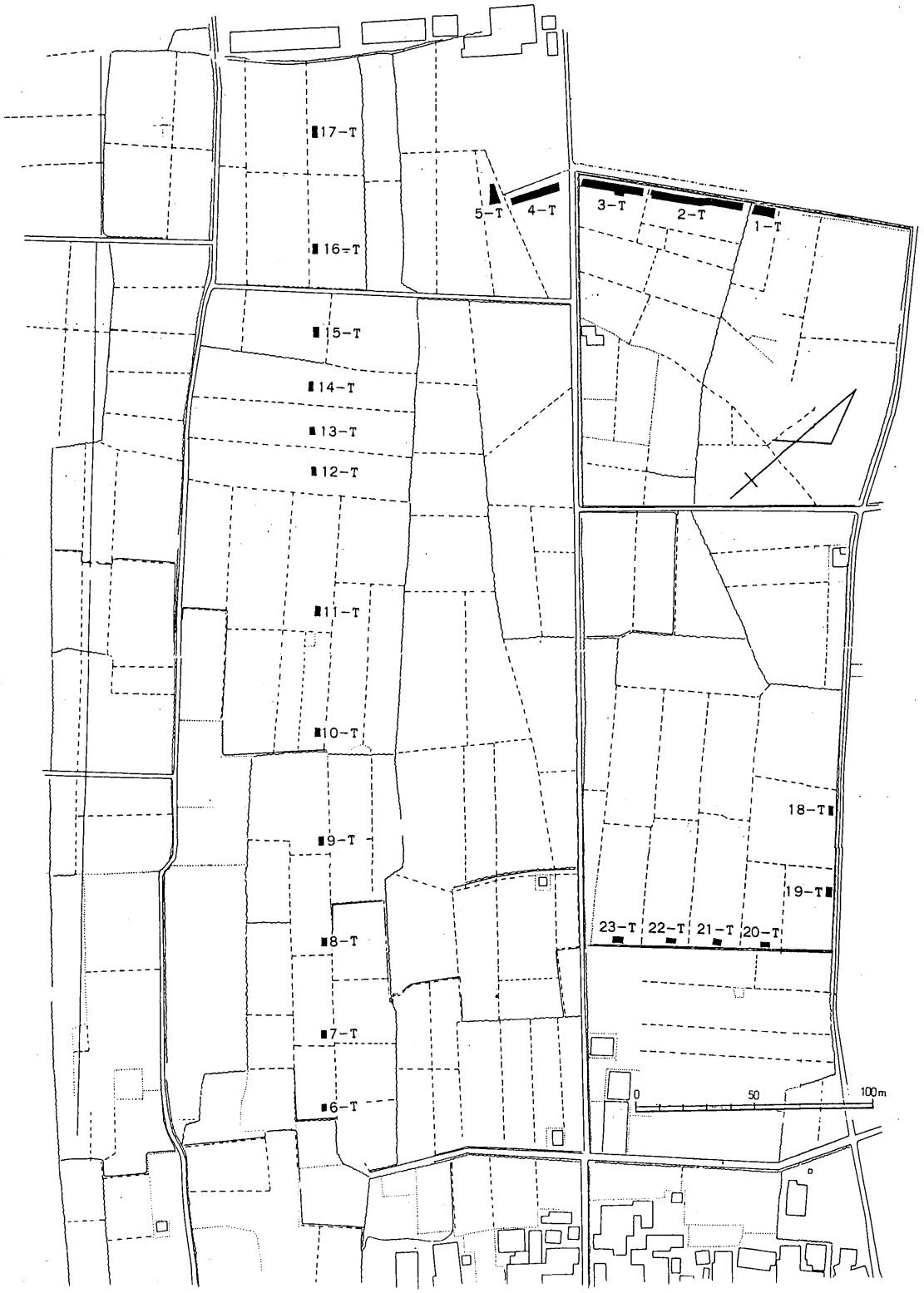
1　耕　土
2　灰褐色粘質土層
3　褐灰色粘質土層
4　暗灰褐色粘質土層
5　暗褐茶色砂混粘質土層
6　淡茶灰色粘質土（砂っぽい）
7　暗灰色粘土層

図版－３　上沢尻遺跡１～３Ｔ遺構図および断面図

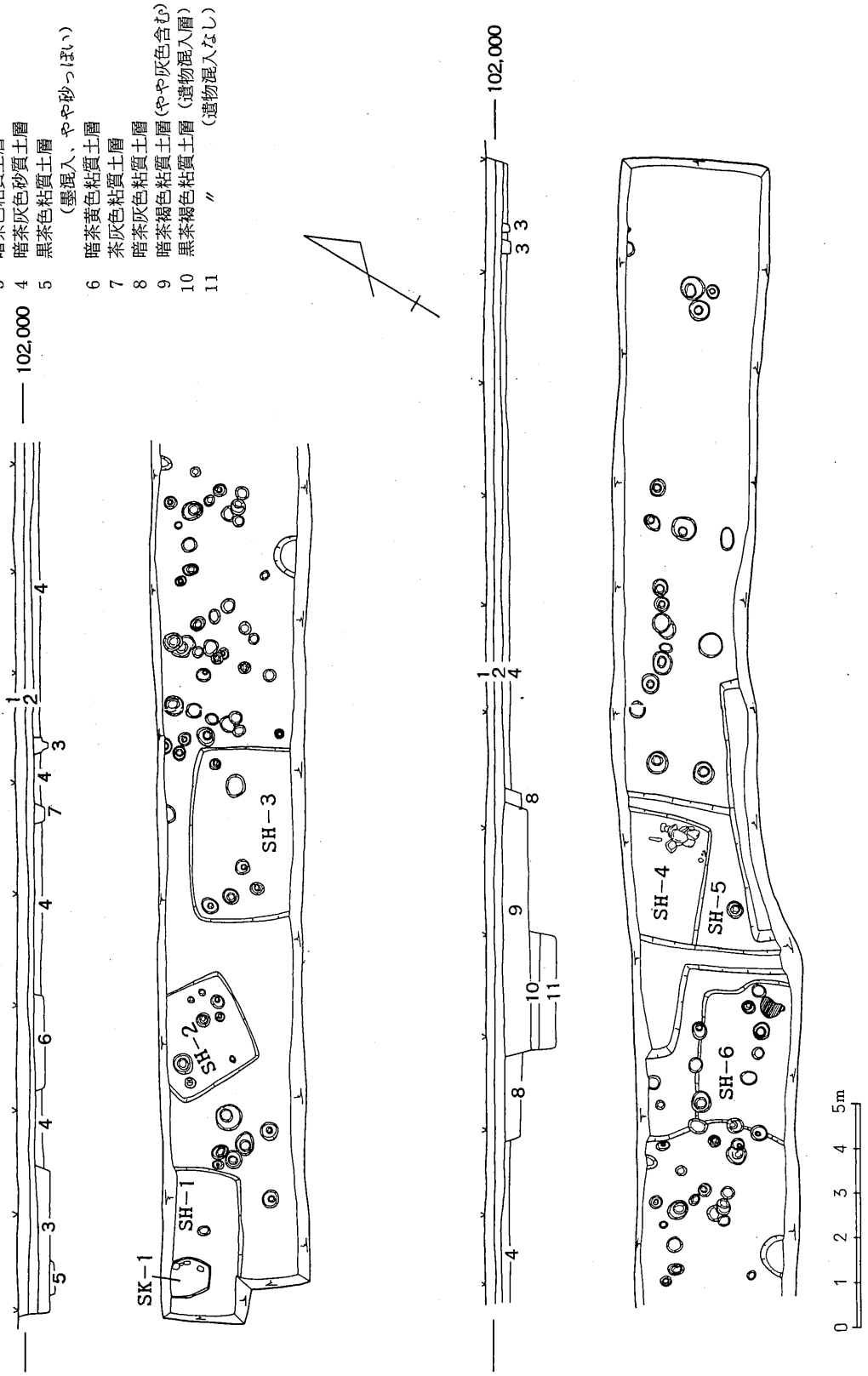


図版－4　南川瀬南遺跡調査地点と周辺の遺跡

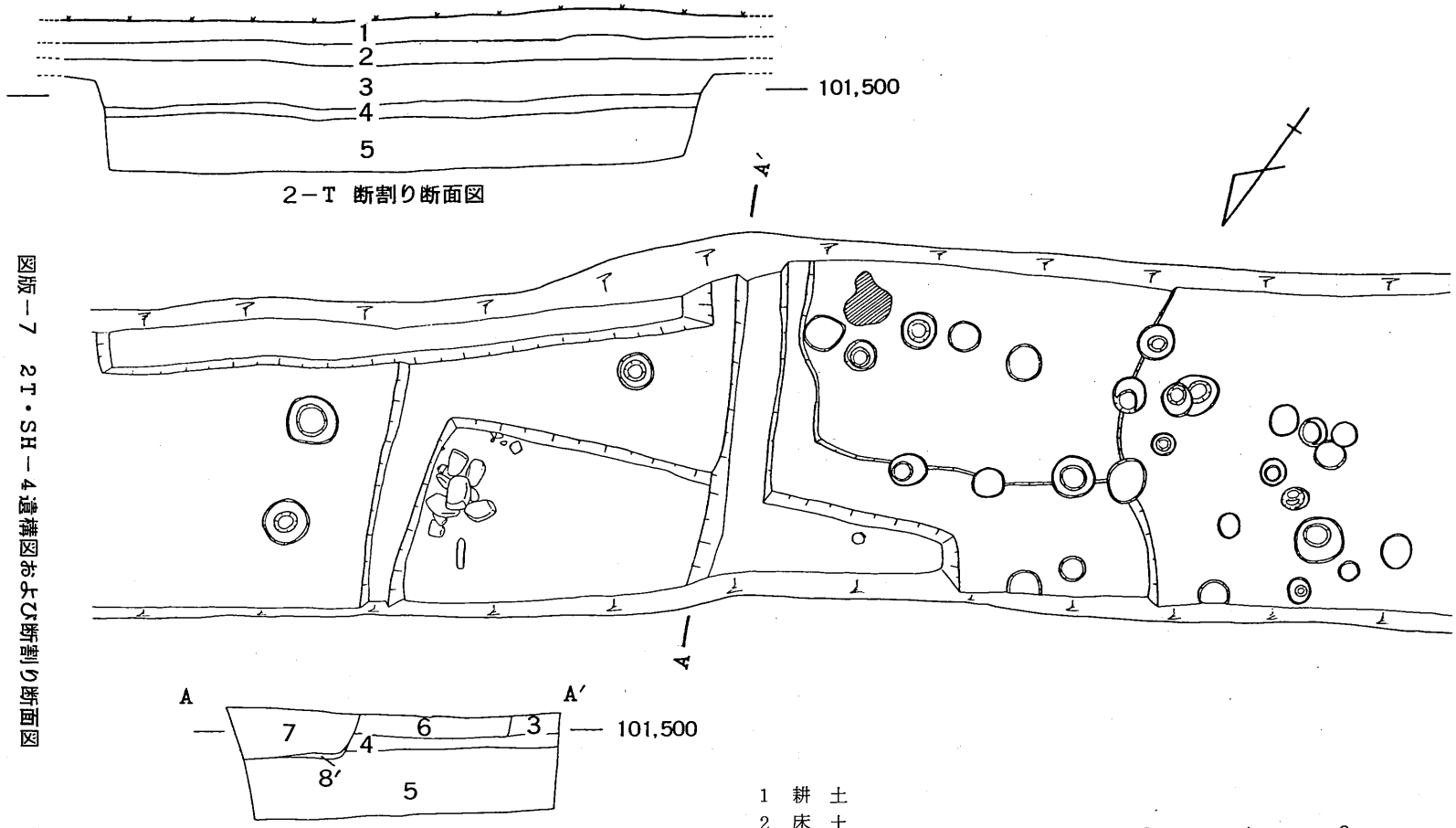
1	南川瀬南遺跡（今回調査地）	9	神ノ木遺跡
2	高宮城跡	10	極楽寺遺跡
3	カツトリ遺跡	11	天田遺跡
4	法師南遺跡	12	南河瀬遺跡
5	段ノ東遺跡	13	西海道遺跡
6	葛籠北遺跡	14	杉田遺跡
7	西葛籠遺跡	15	鶴ケ池遺跡
8	葛籠南遺跡	16	十八遺跡



図版－5　南川瀬南遺跡トレンチ配位図



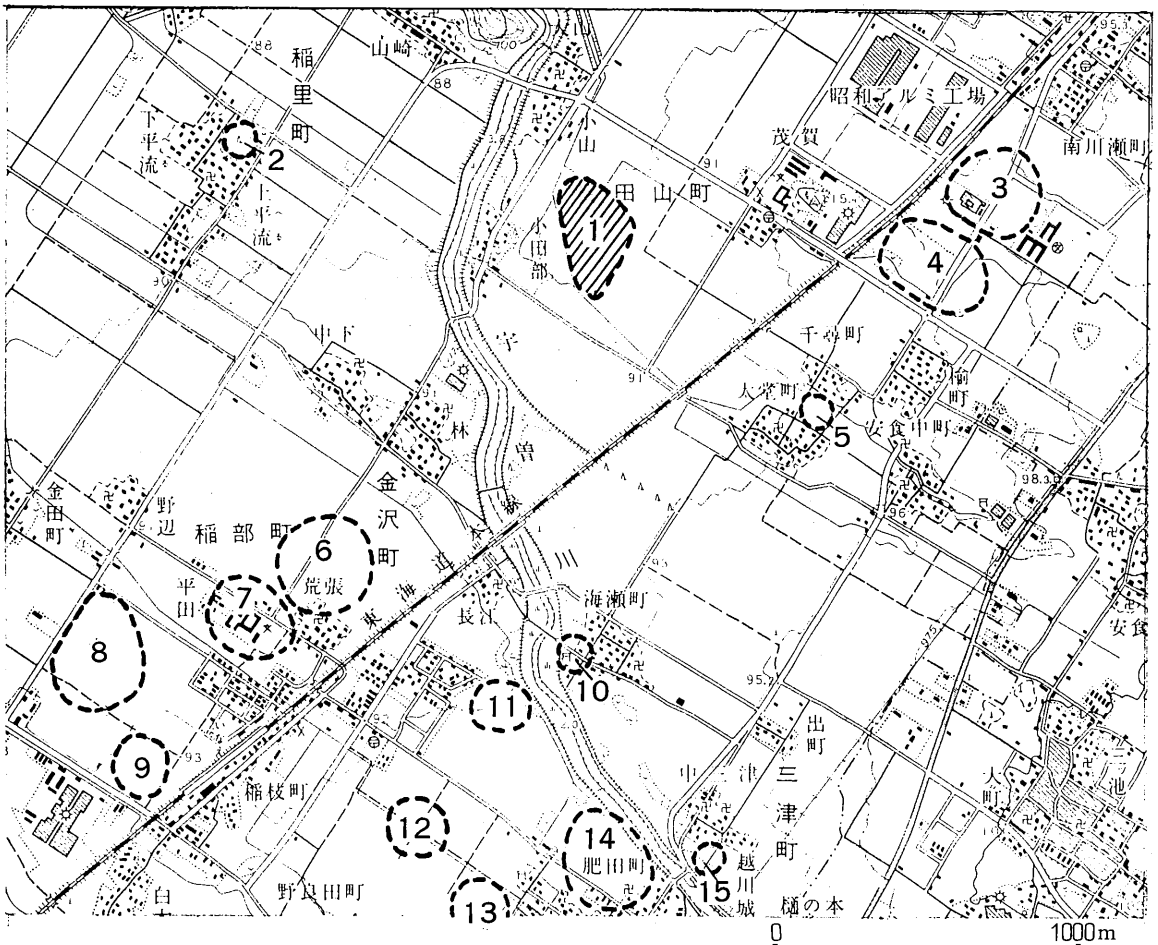
図版－6　南川瀬南遺跡２Ｔ遺構図及び断面図



1 耕 土
2 床 土
3 明茶褐色砂質土層
4 淡黄茶色粘質土層
5 黒茶灰色粘質土層（上部遺物混入）
6 暗茶灰色粘質土層
7 暗茶褐色粘質土層
8 淡黄色粘土層

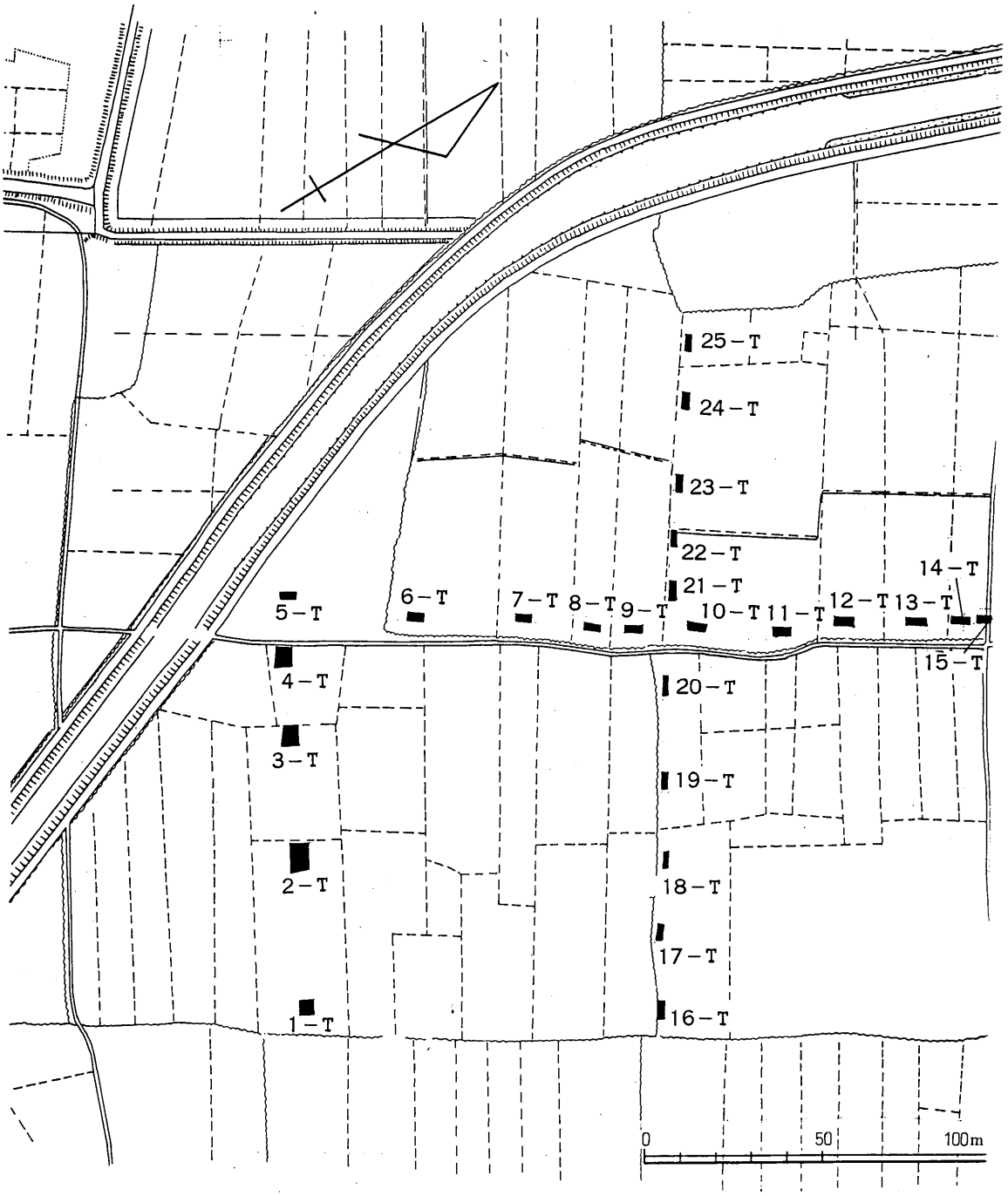
0 1 2m

図版－7 2T・SH－4遺構図および断割り断面図

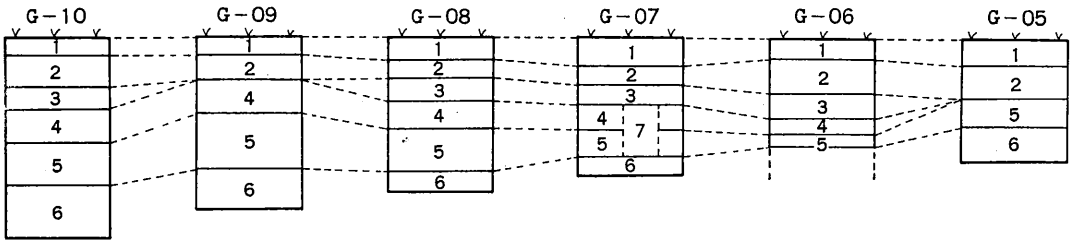


図版－8　鍬取遺跡調査地点と周辺の遺跡

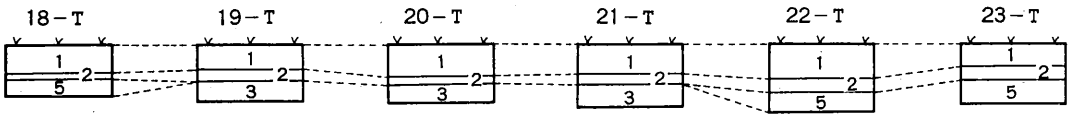
1	鍬取遺跡（今回調査地）	9	稲枝遺跡
2	平流城跡	10	宝山寺遺跡
3	十八遺跡	11	肥田西遺跡
4	横田遺跡	12	鶴田遺跡
5	千尋遺跡	13	肥田南遺跡
6	沢田遺跡	14	肥田城跡
7	稲部遺跡	15	川越城跡
8	稲枝西遺跡		

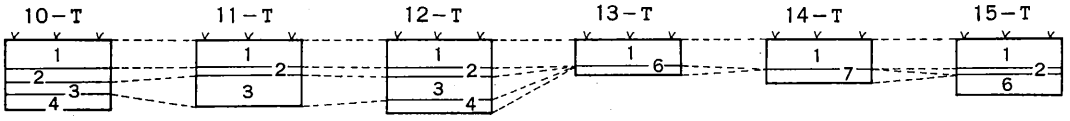


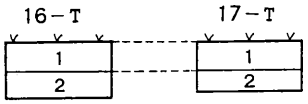
図版－9　鍬取遺跡トレンチ配位図

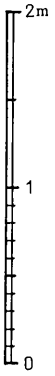


上沢尻遺跡



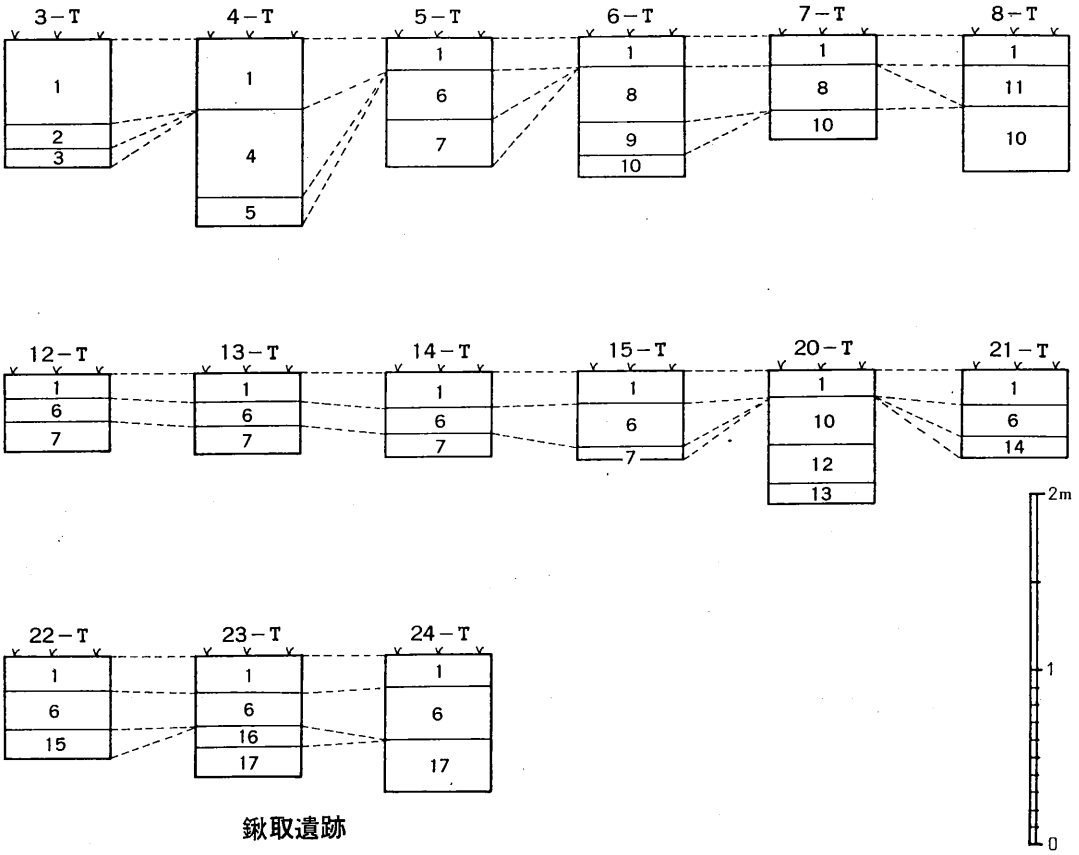






南川瀬南遺跡

図版－10　上沢尻遺跡および南川瀬南遺跡土層柱状図



鍬取遺跡

鍬取遺跡土色表

1 耕　土
2 灰茶色砂層
3 茶褐色砂層
4 茶灰色砂レキ層
5 暗灰色粘質土十砂層
6 明褐灰色粘質土層
7 明灰褐色粘質土層
8 灰褐色粘質土層
9 明茶褐色砂層
10 灰青色粘質土層
11 暗灰色粘質土層
12 暗灰色粘土層
13 明灰青色砂質土層
14 明茶褐色粘質土層
15 〃　（小レキ混入）
16 茶褐色砂レキ土層
17 暗灰褐色粘質土層（小レキ混入）

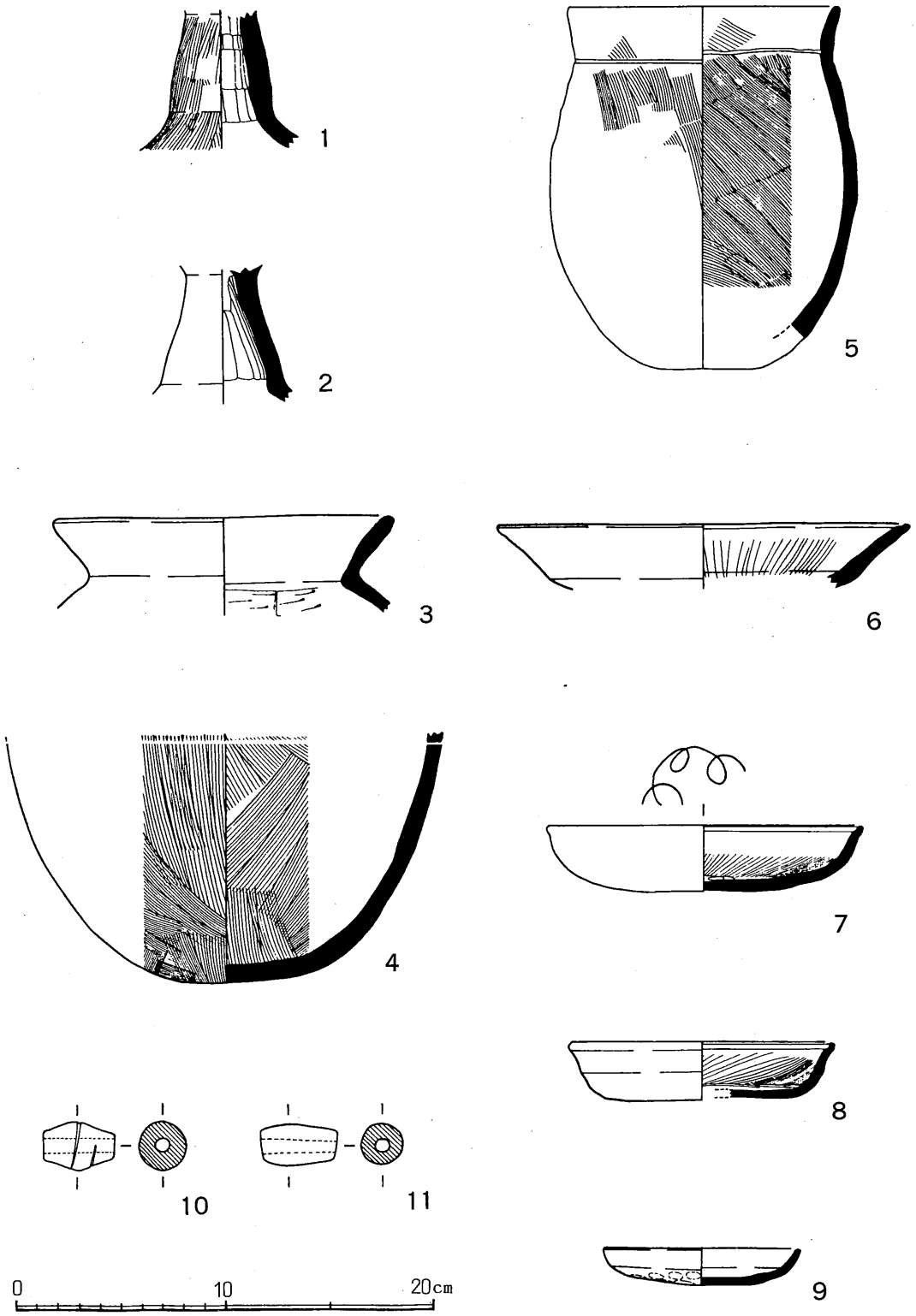
上沢尻遺跡土色表

1 耕　土
2 明灰褐色粘質土層
3 明茶灰色粘質土層
4 灰褐色粘質土層
5 褐茶色粘質土層
6 暗灰色粘土層
7 茶褐色茶層

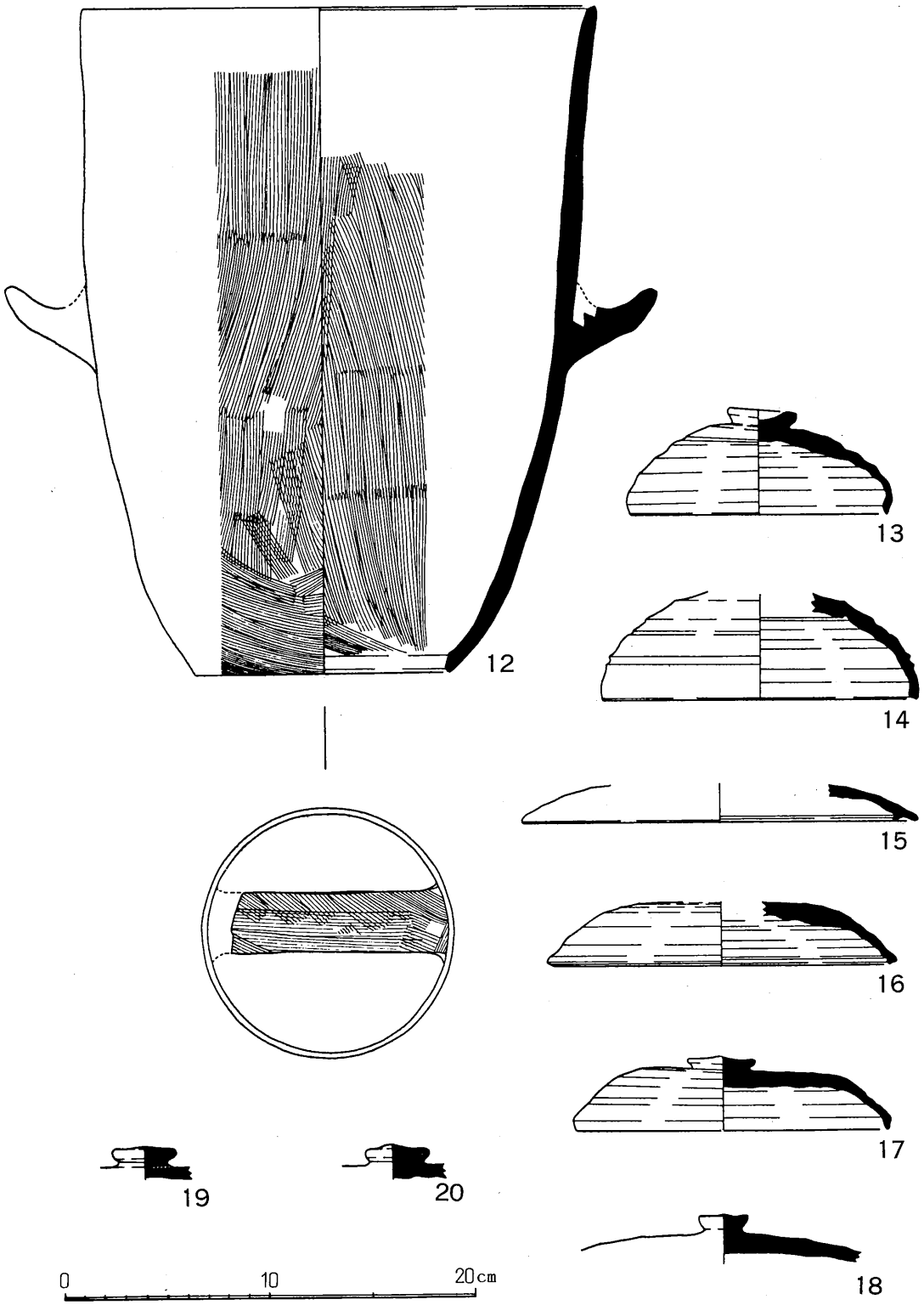
南川瀬南遺跡土色表

1 耕　土
2 床　土（暗灰色粘質土）
3 暗茶褐色粘質土層（小レキ混入）
4 濃灰色土層（やや褐色混入）
5 濃灰黄色土層
6 暗灰茶色粘質土層
7 淡黄灰色粘質土層

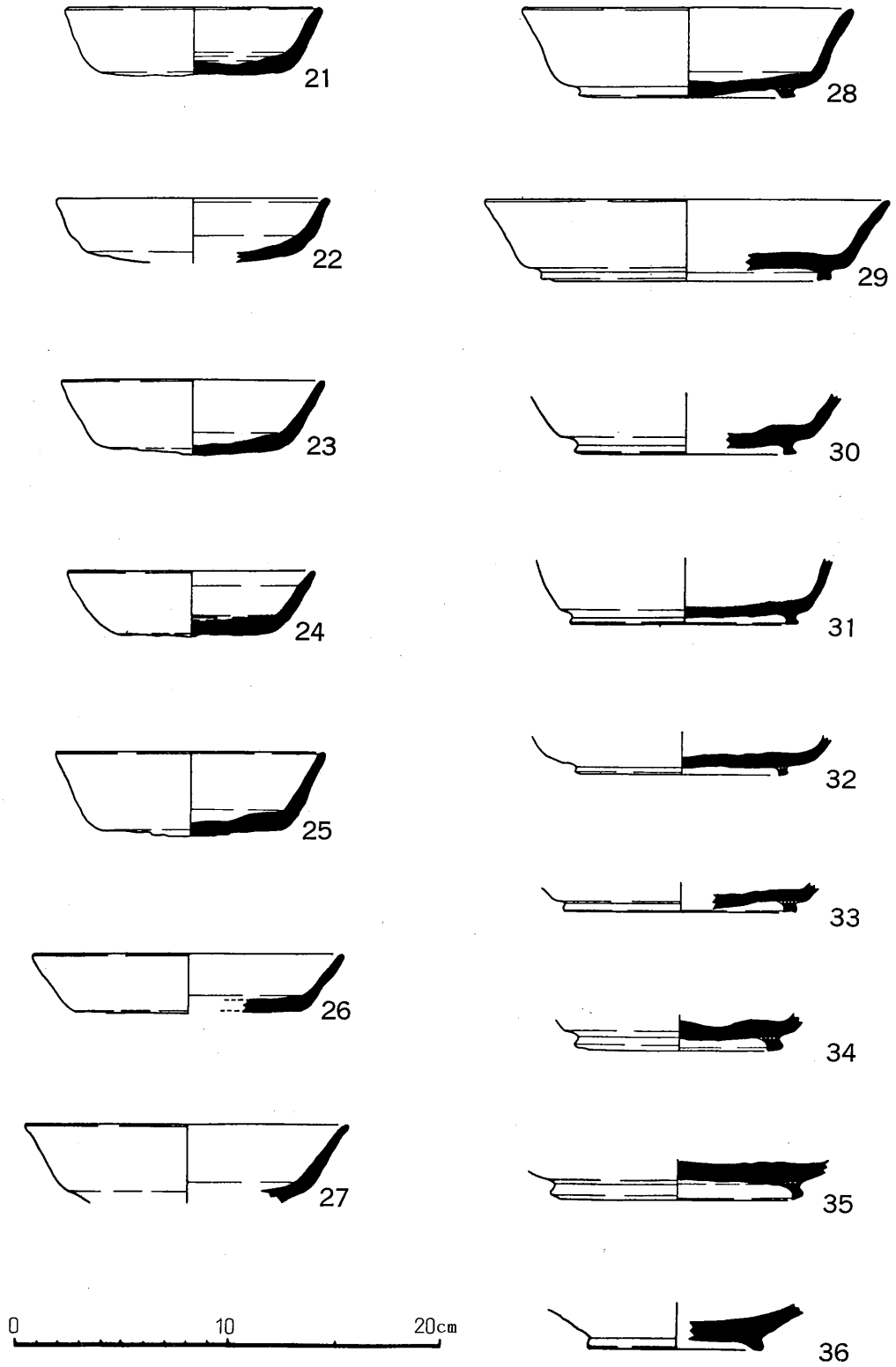
図版－11　鍬取遺跡土層柱状図および土色表



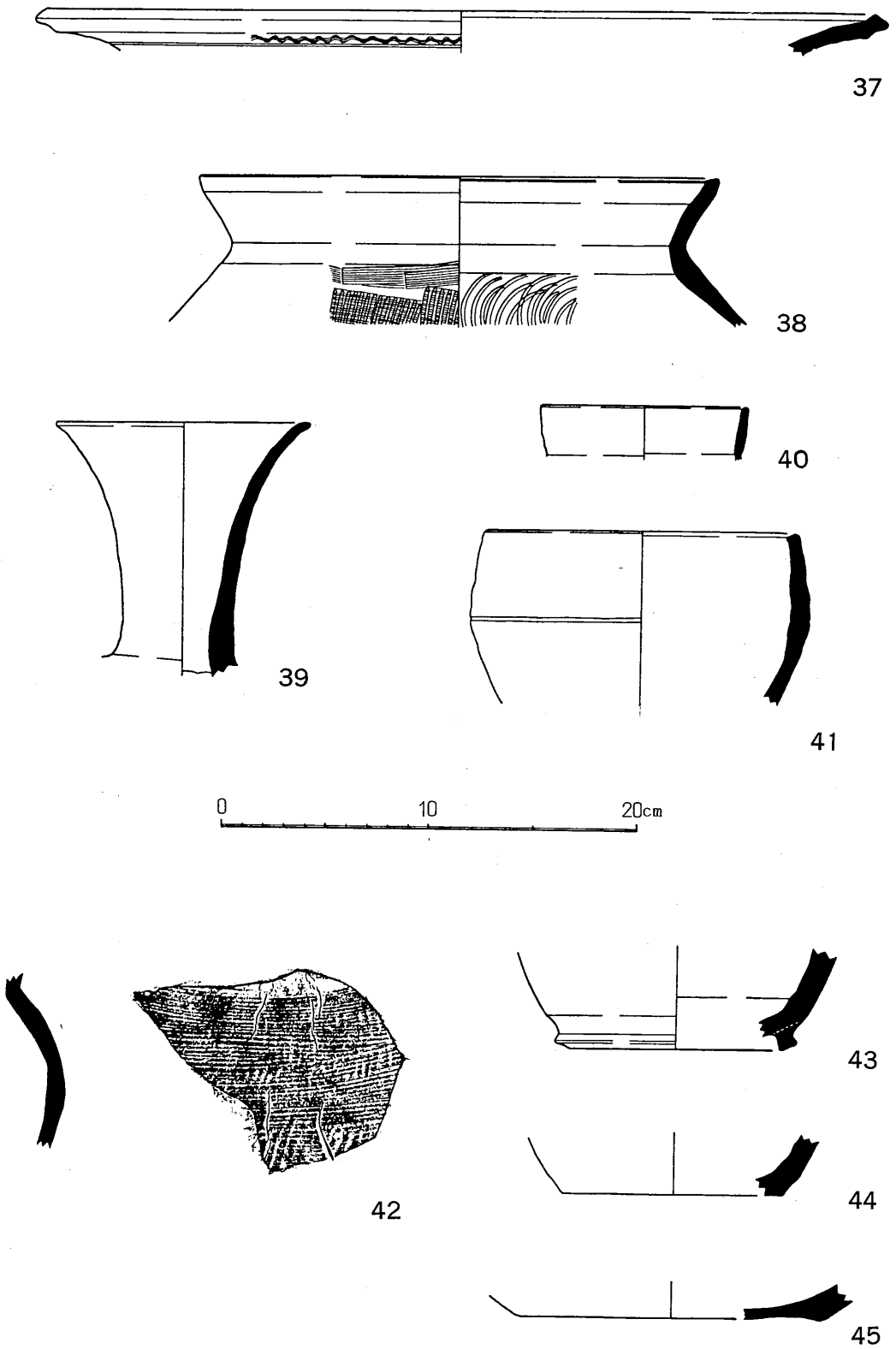
図版－12　上沢尻遺跡出土遺物実測図



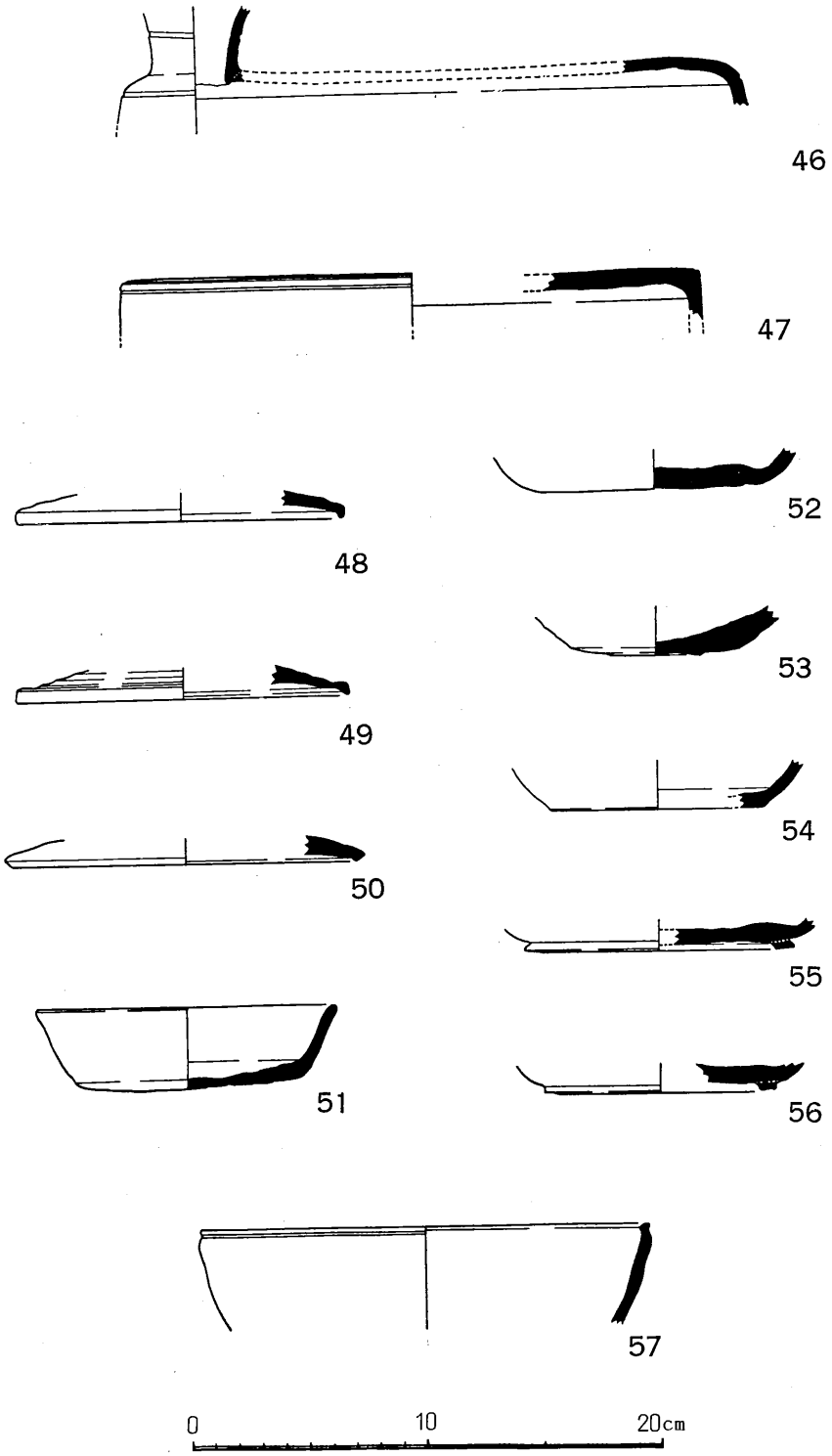
図版－13　上沢尻遺跡出土遺物実測図



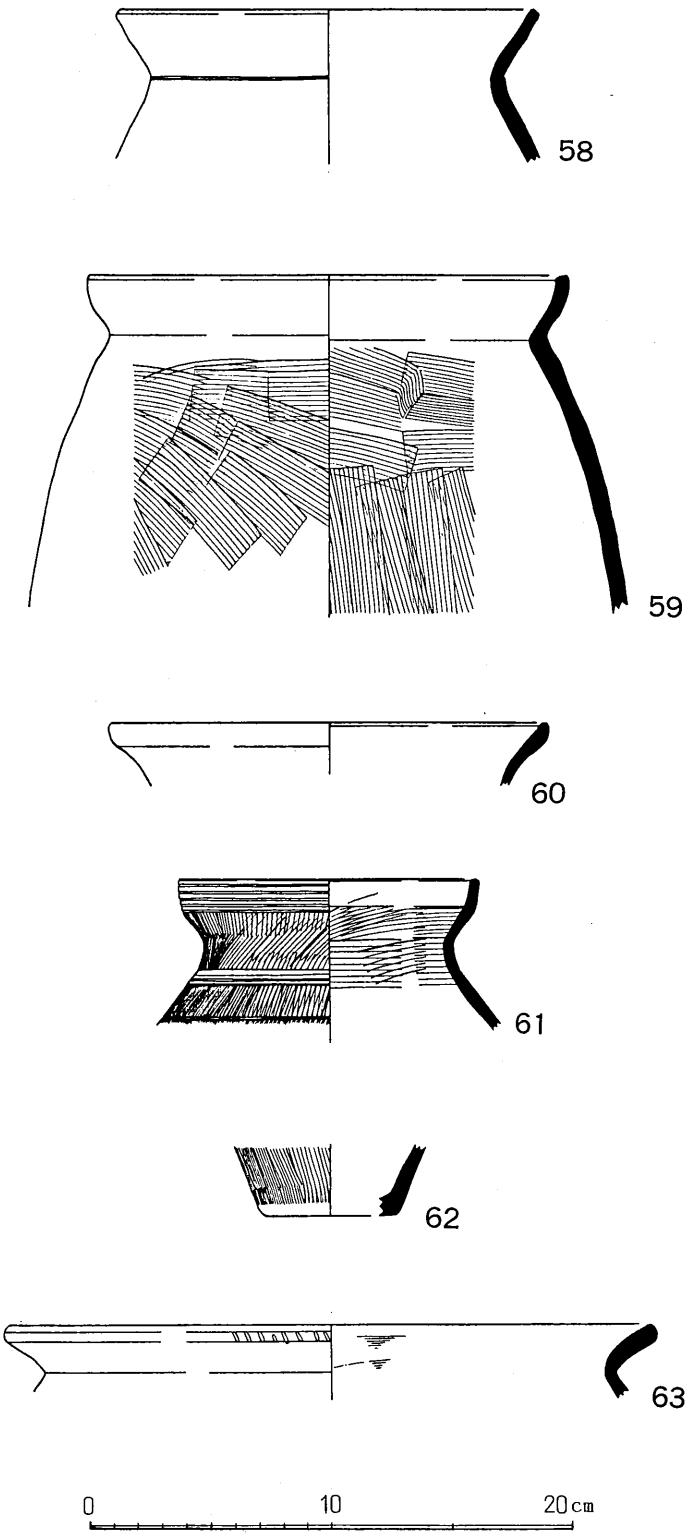
図版－14　上沢尻遺跡出土遺物実測図



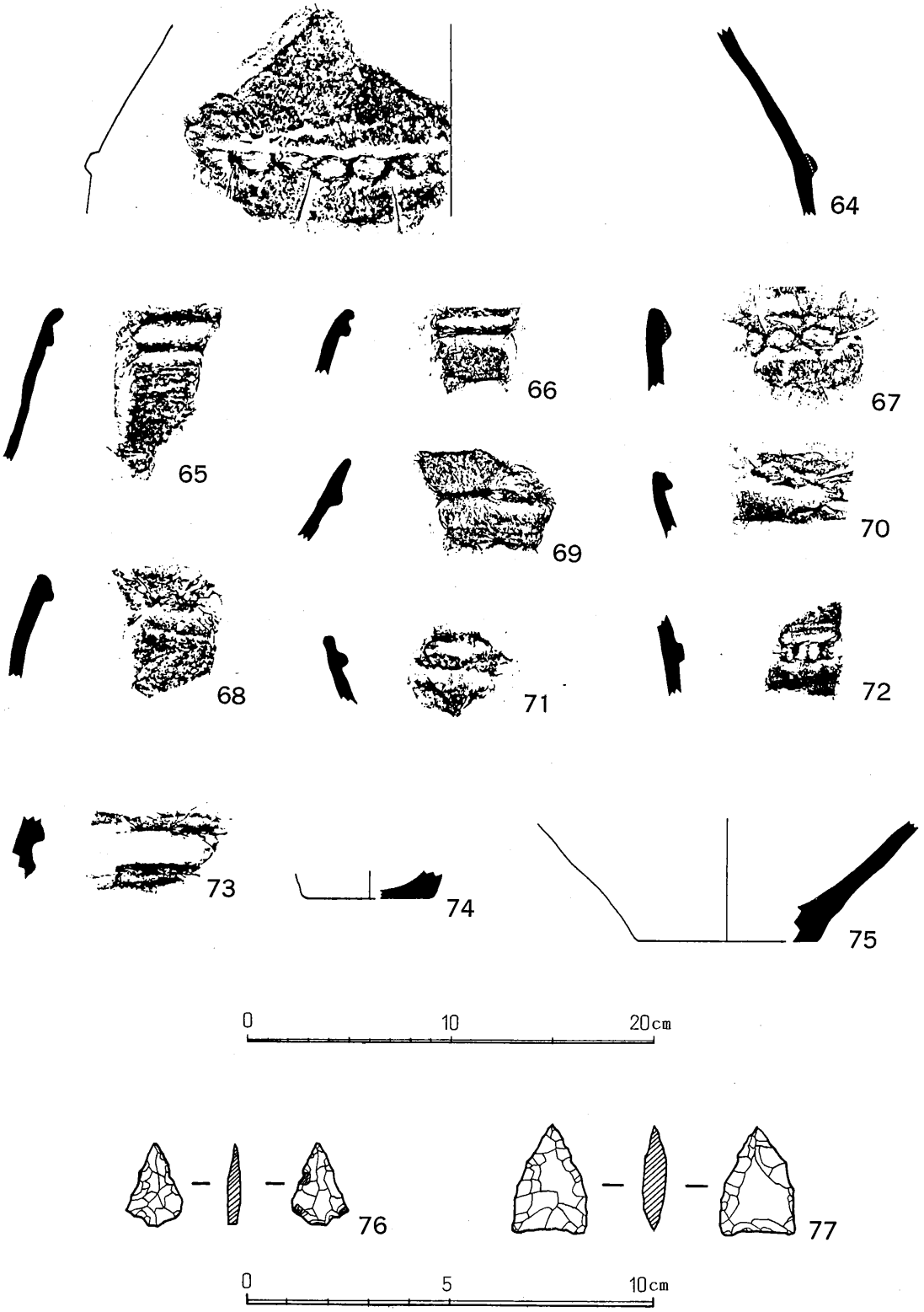
図版－15　上沢尻遺跡および南川瀬南遺跡出土遺物実測図



図版－16　南川瀬南遺跡出土遺物実測図



図版－17　南川瀬南遺跡出土遺物実測図

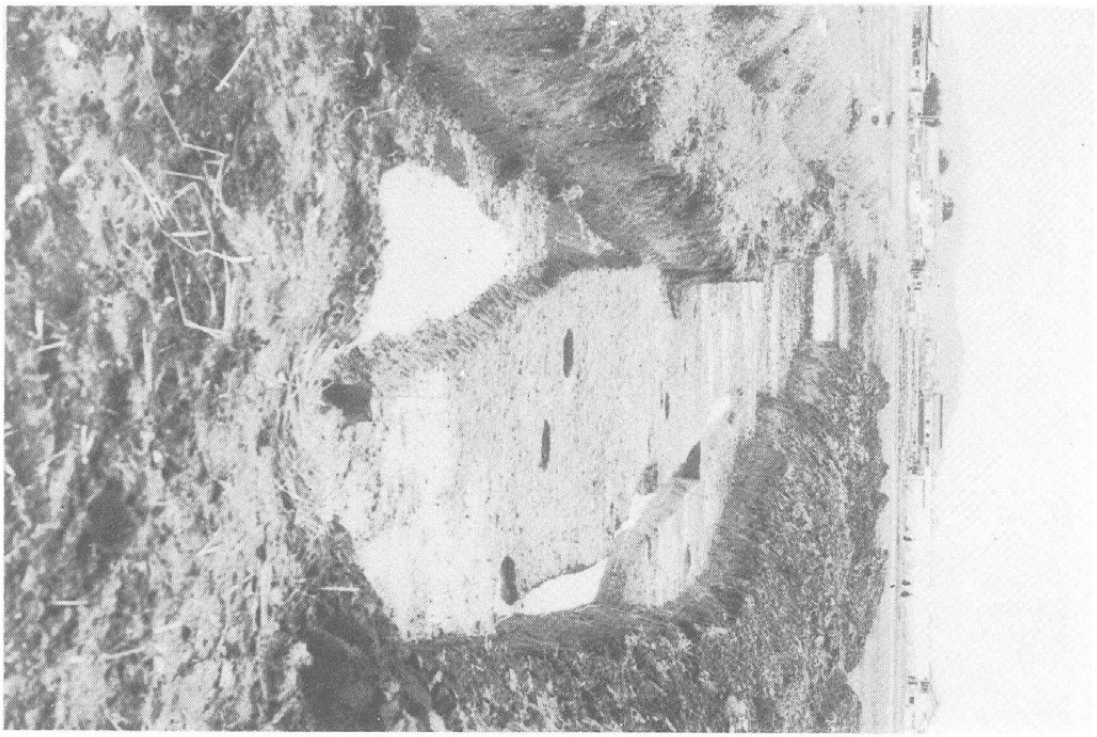


図版－18　南川瀬南遺跡出土遺物実測図

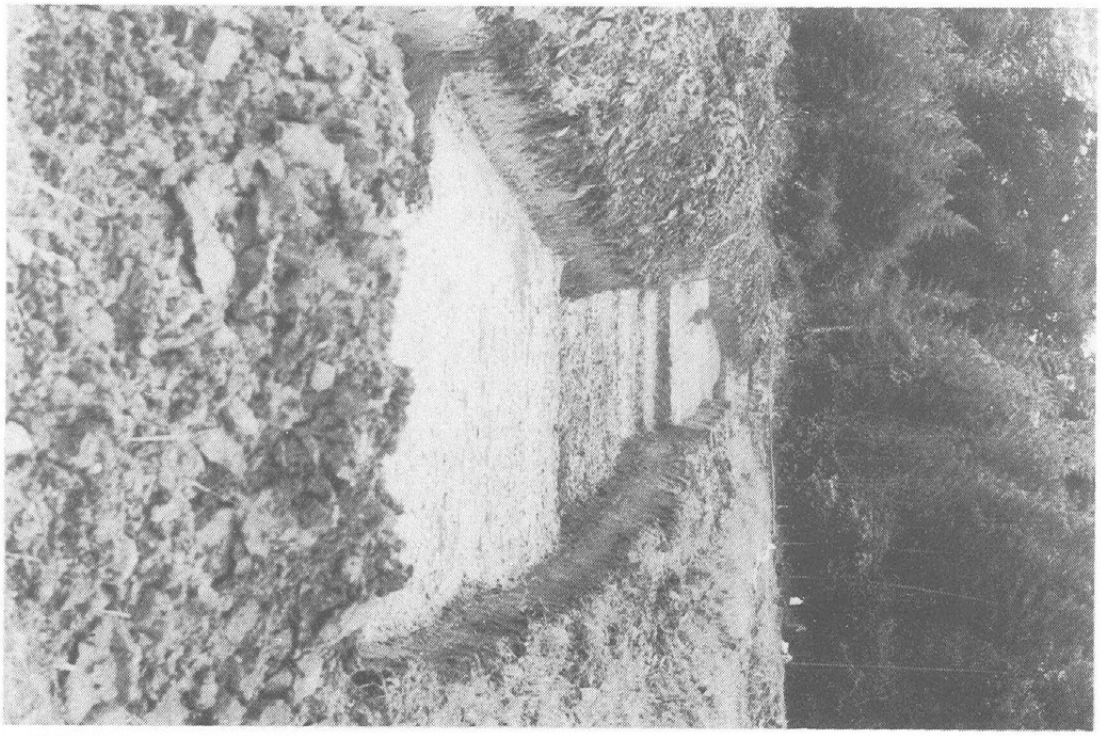
調査地近景

写真図版－1　上沢尻遺跡

調査地近景



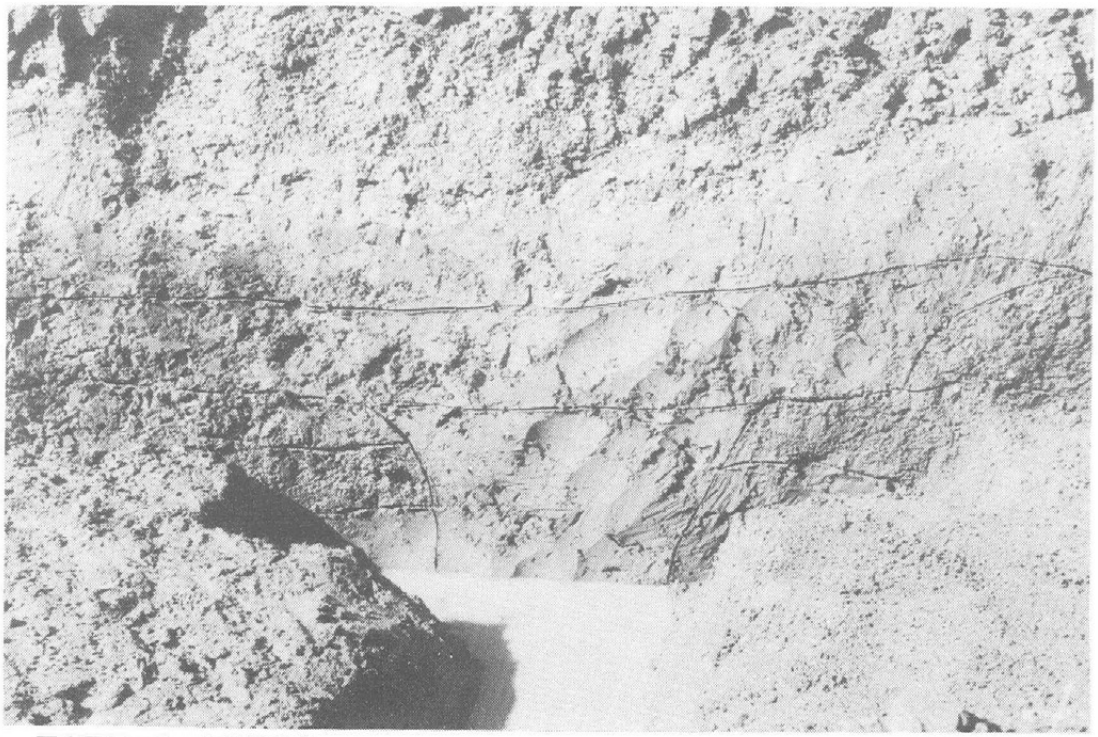
1～3Ｔ全景（北から）



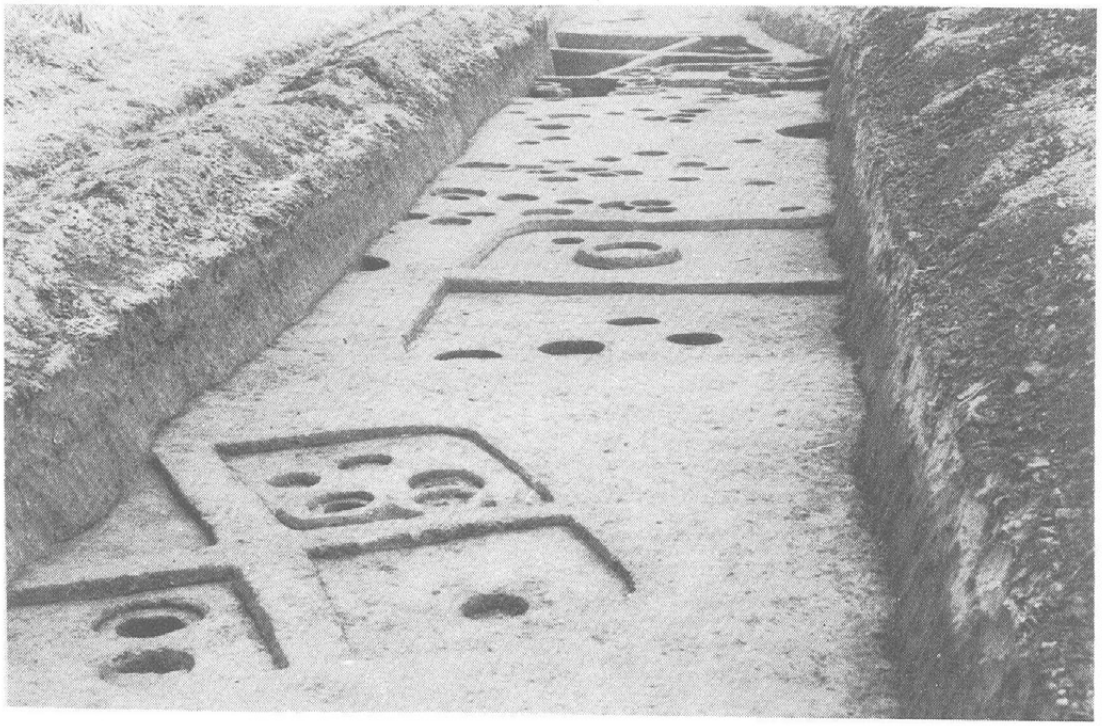
写真図版－２　上沢尻遺跡

1～3Ｔ全景（南から）

上沢尻遺跡１～３Ｔ第２遺構面



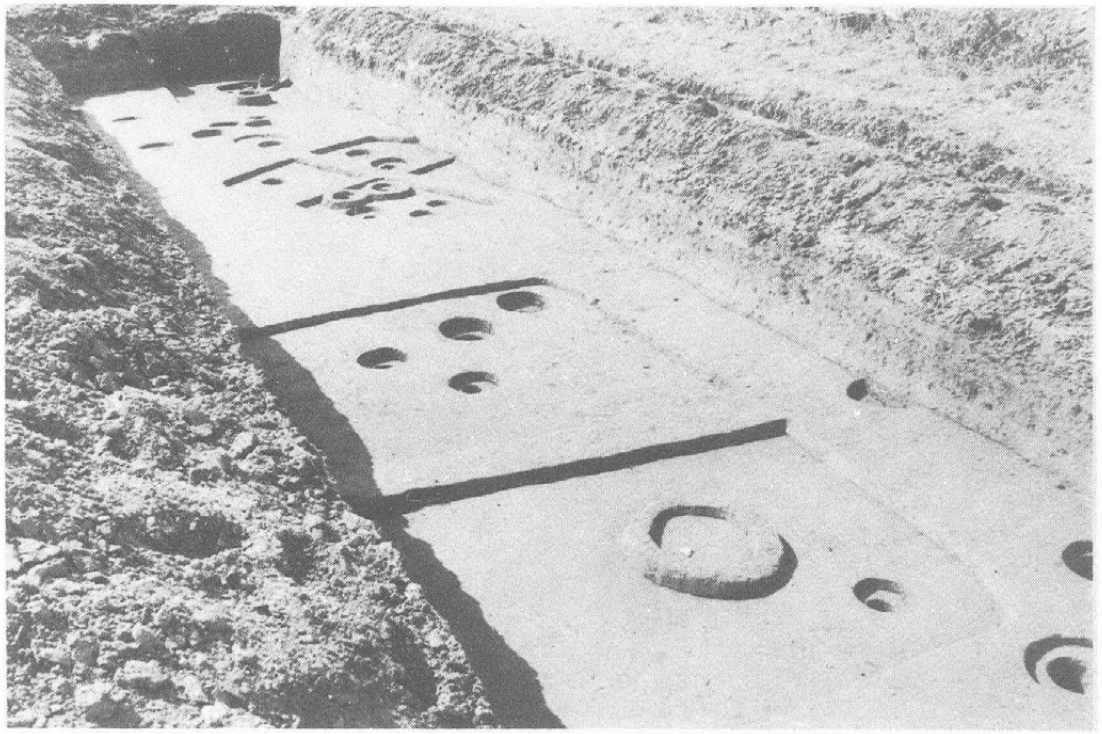
写真図版－３　上沢尻遺跡　　ＳＤ－06断面



２Ｔ（南から）

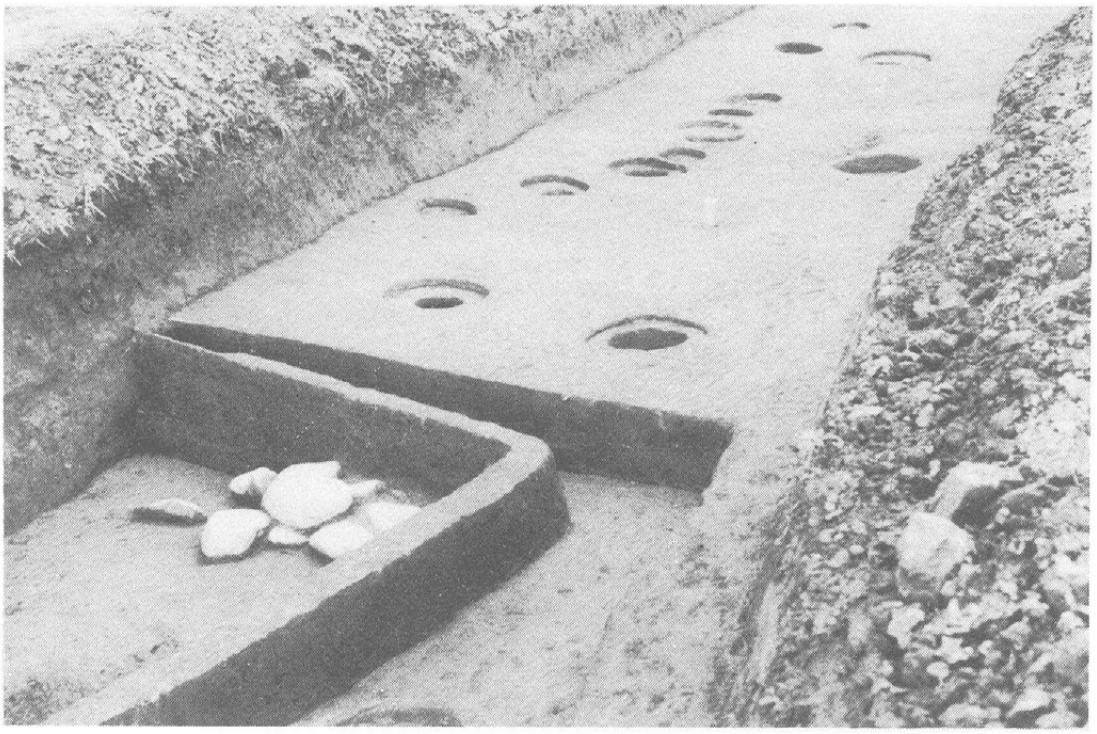
写真図版－４　南川瀬南遺跡

２Ｔ（北から）

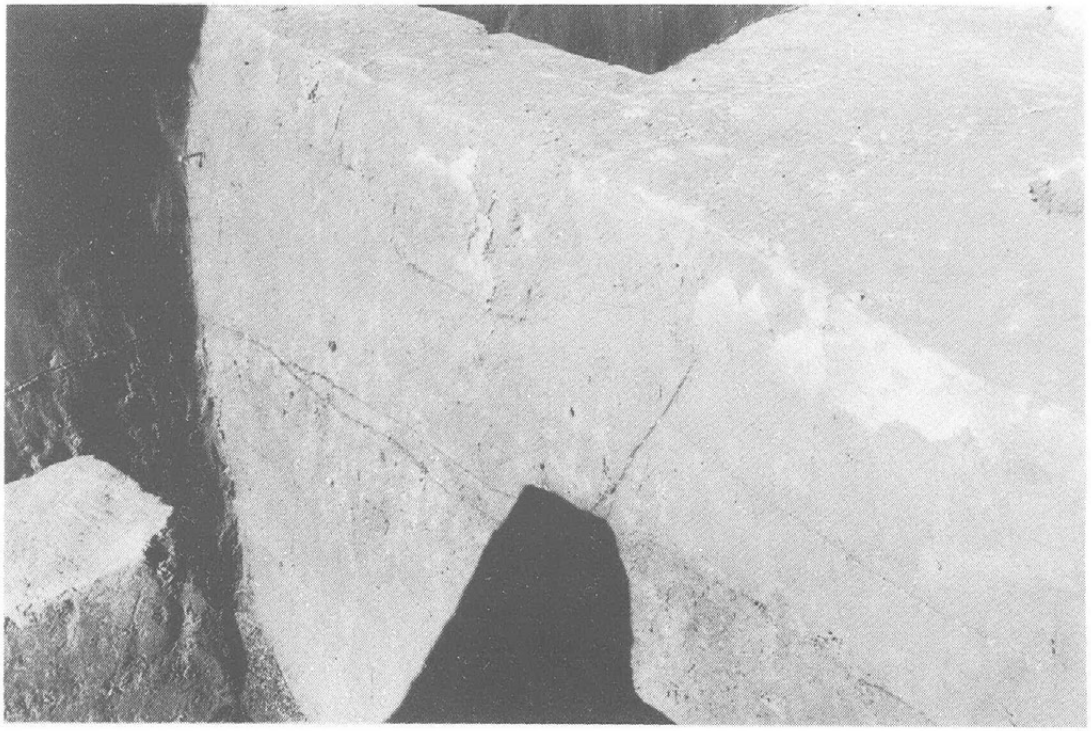


２Ｔ遺構面

写真図版－５　南川瀬南遺跡　　２Ｔ　ＳＨ－１およびＳＫ－１

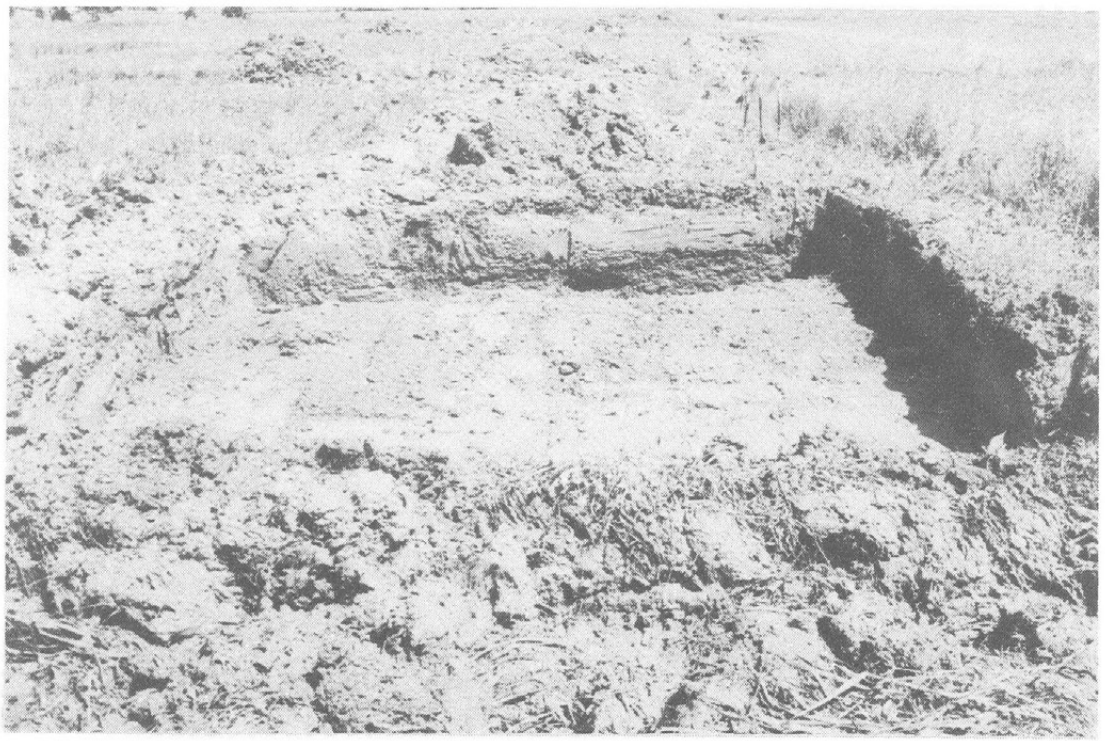


SH－4集石遺構

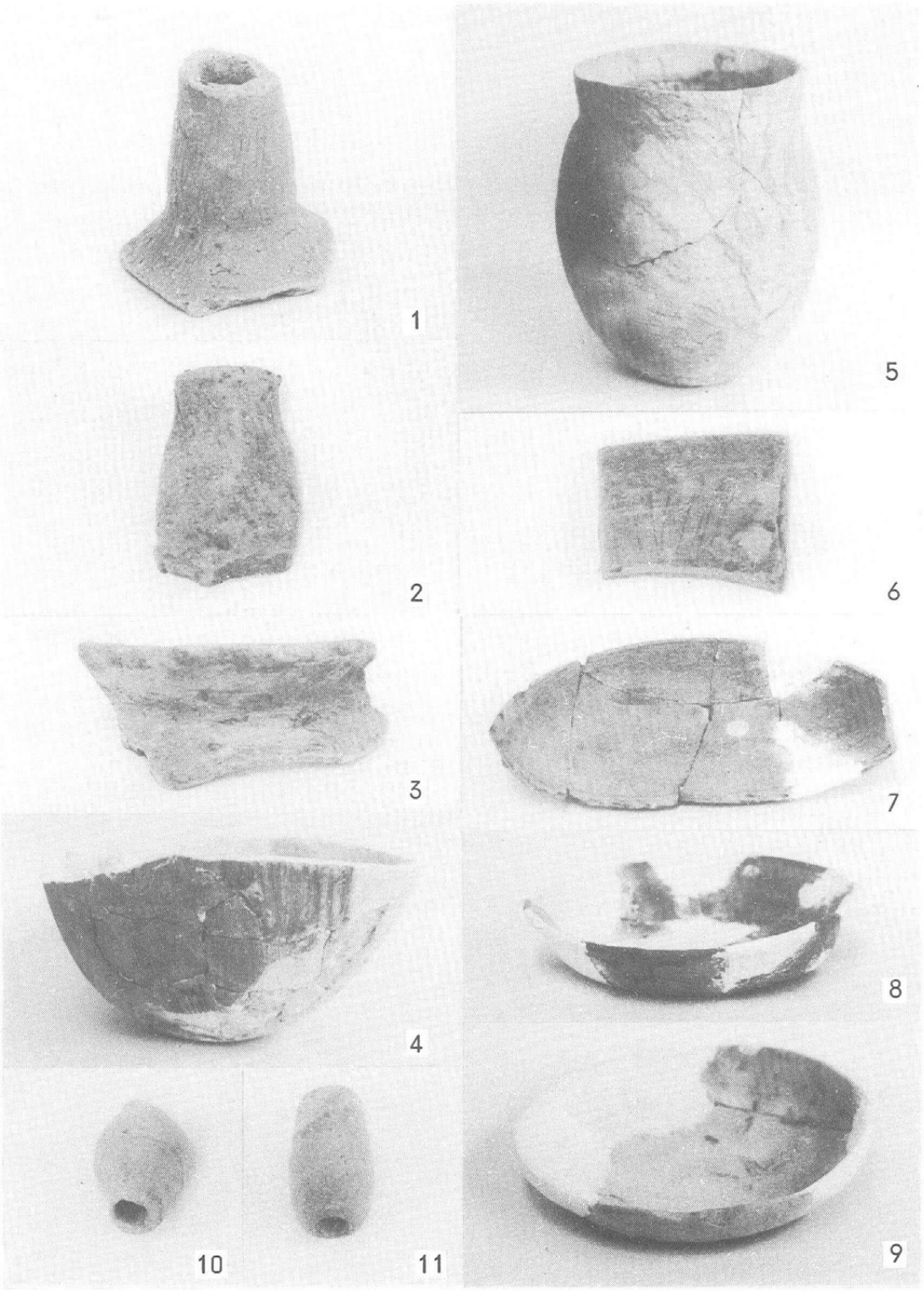


写真図版－6　南川瀬南遺跡　　SH－4断面

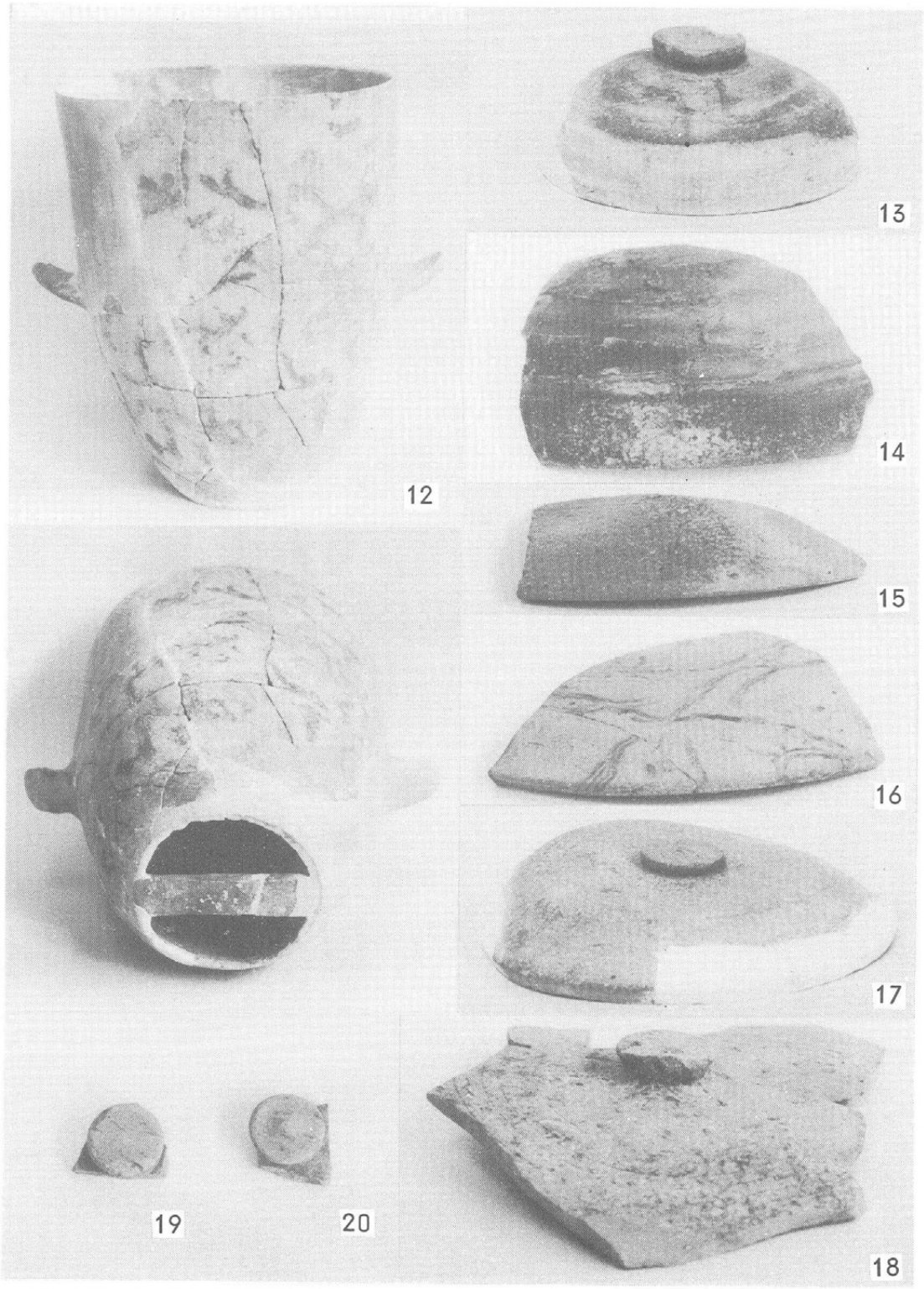
調査地近景



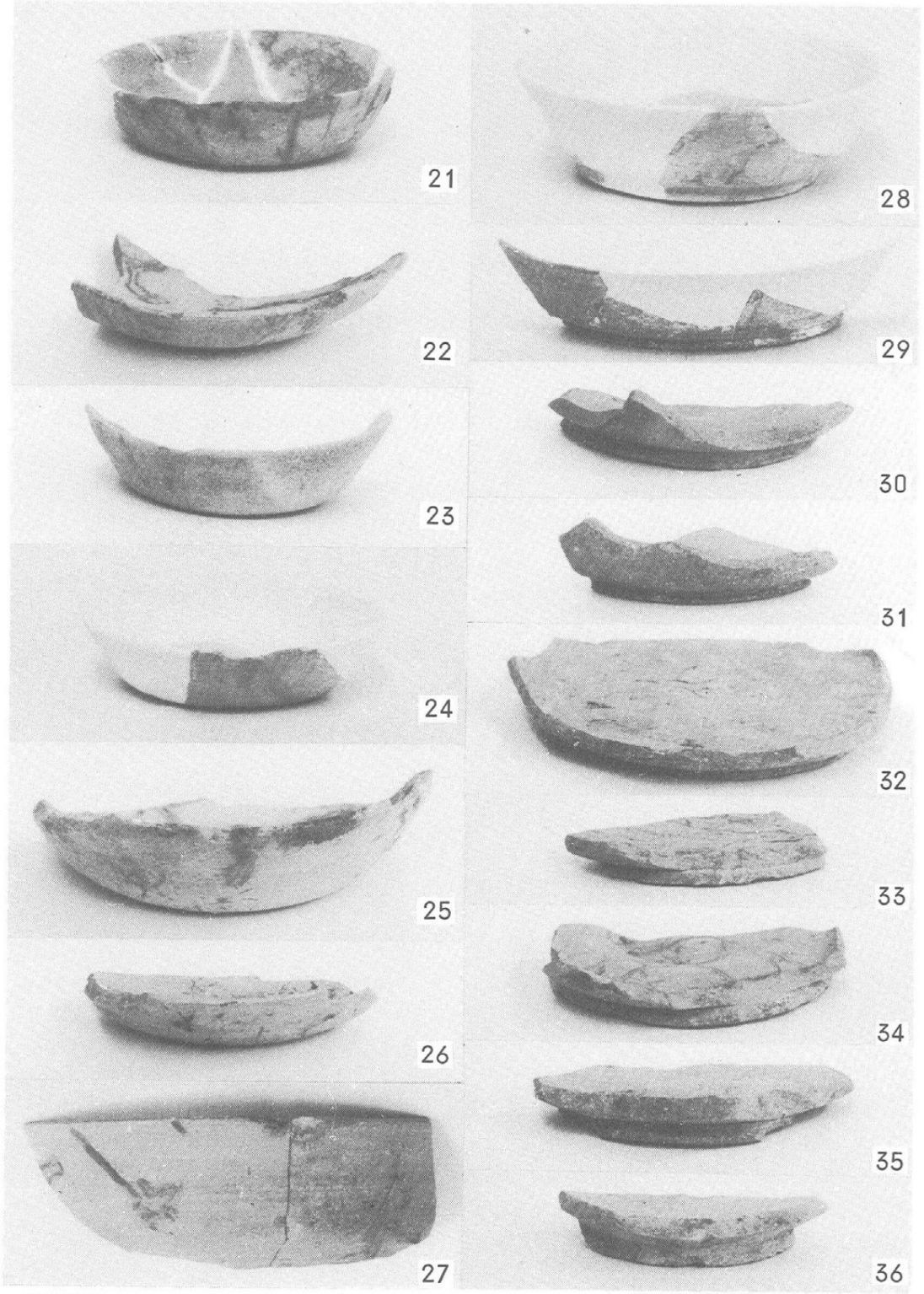
写真図版－7　鍬取遺跡　　3Ｔ試掘調査



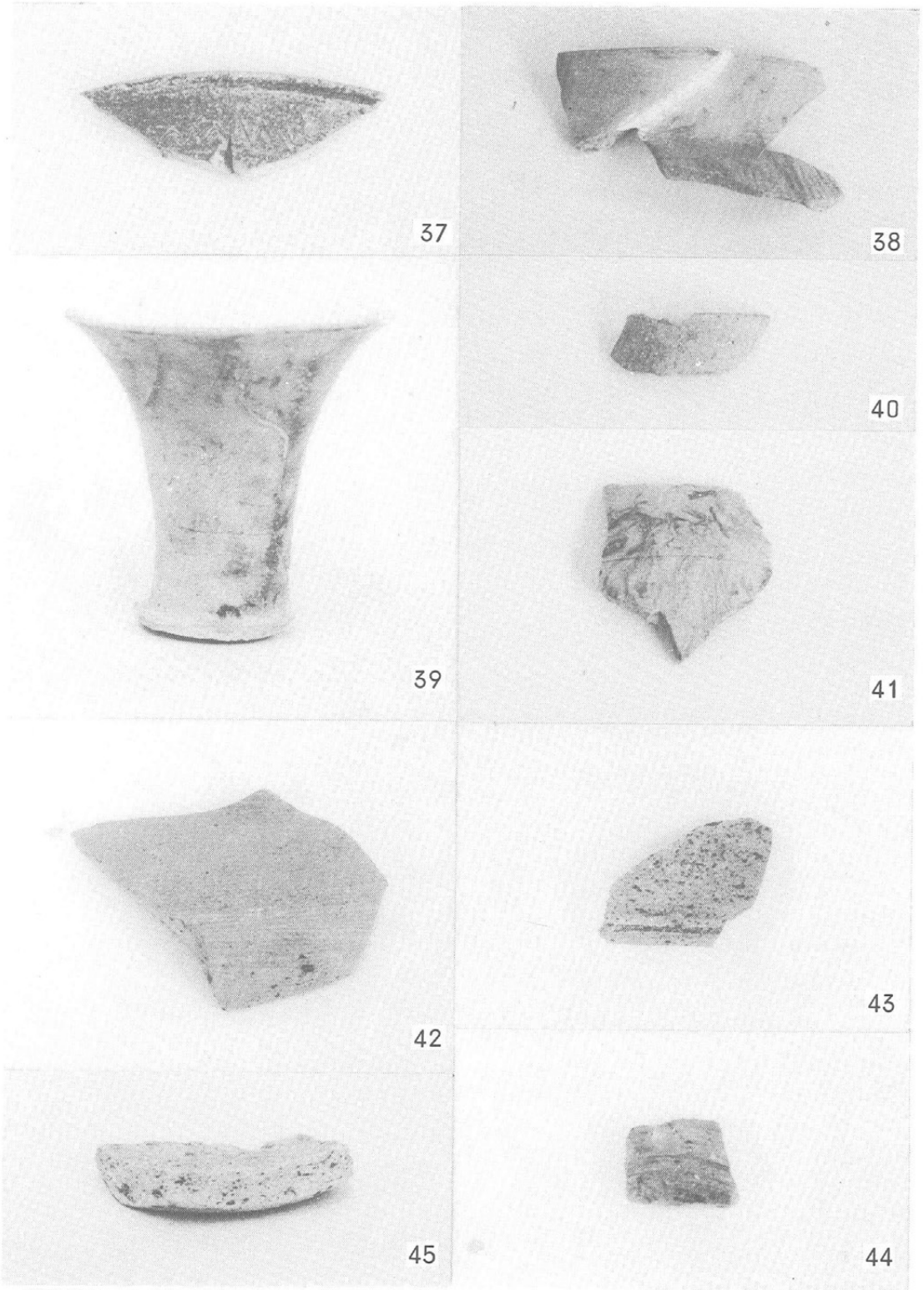
写真図版－8　上沢尻遺跡出土遺物



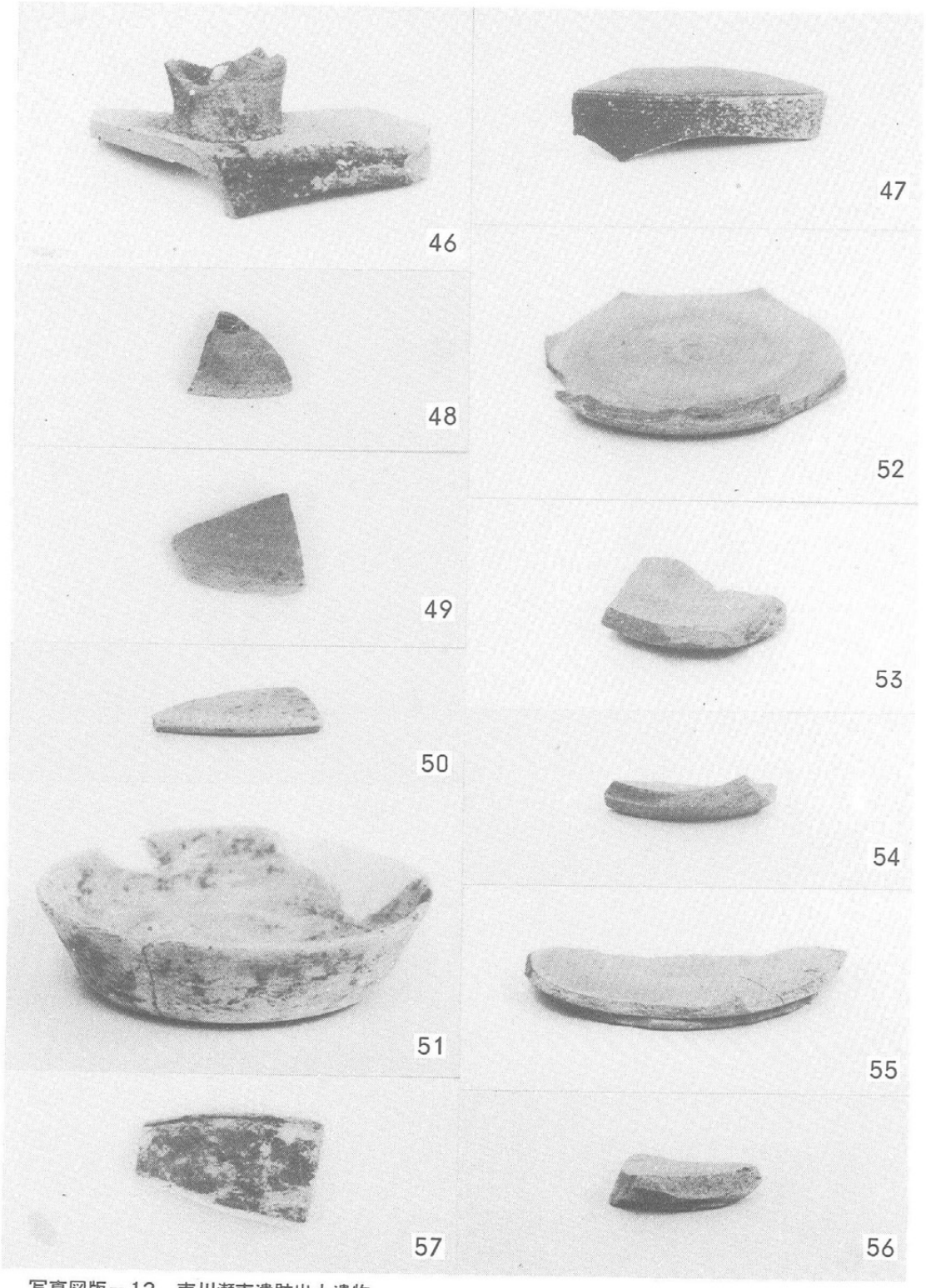
写真図版－9　上沢尻遺跡出土遺物



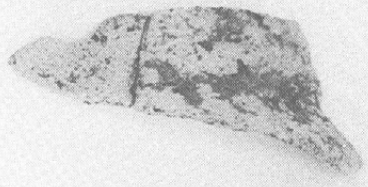
写真図版－10　上沢尻遺跡出土遺物



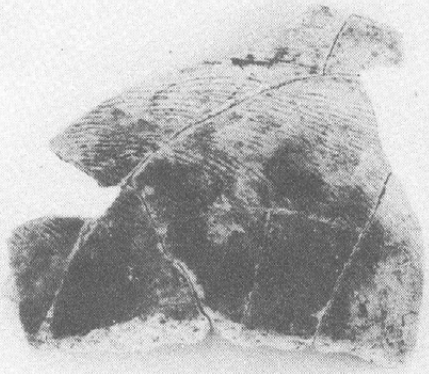
写真図版－11　上沢尻遺跡出土遺物



写真図版－12　南川瀬南遺跡出土遺物

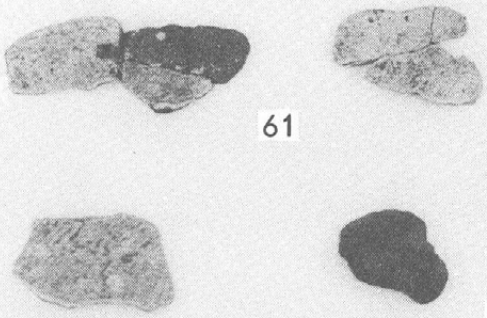


58



59

60

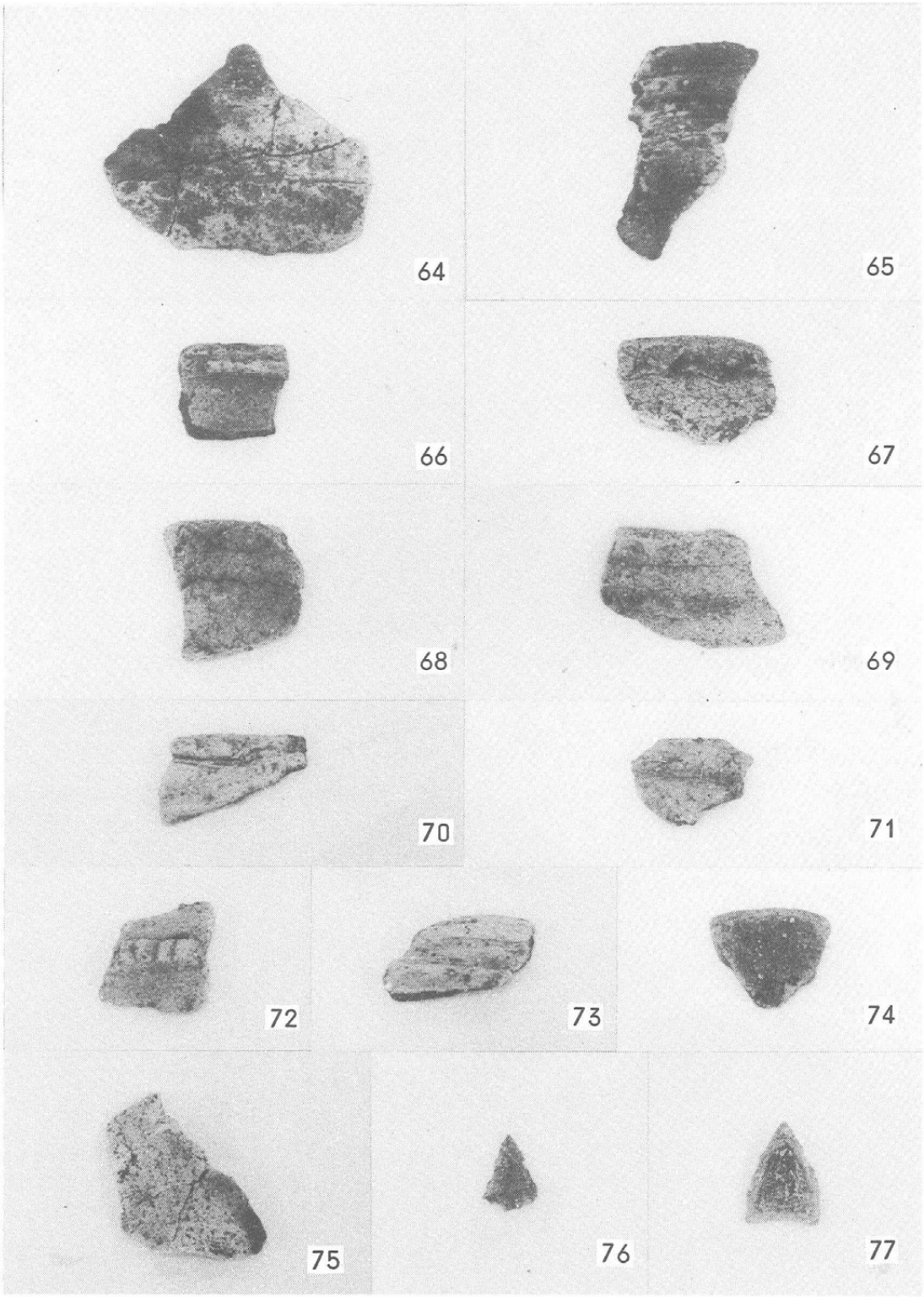


61

62

63

写真図版－13　南川瀬南遺跡出土遺物



写真図版－14　南川瀬南遺跡出土遺物

彦根市埋蔵文化財調査報告第14集

上沢尻・南川瀬・鍬取遺跡発掘調査報告書

1987

編　集　彦根市教育委員会
発　行　彦根市教育委員会
印　刷　㈲つくし出版印刷